

2019年6月22～24日

沖縄慰霊の日

戦後74年、沖縄慰霊の日＝犠牲者追悼、平和誓い 新たな知事は辺野古移設批判

時事通信 2019年06月23日 13時01分



「平和の礎（いしじ）」を訪れ、戦争の

犠牲者を悼む人たちは23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

沖縄は23日、太平洋戦争末期の地上戦の犠牲者を追悼する「慰霊の日」を迎えた。74年前の沖縄戦で最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では、県主催の「沖縄全戦没者追悼式」が開かれ、平和への誓いを新たにされた。

令和初となる追悼式には、安倍晋三首相や衆参両院議長ら約5100人が出席。正午には犠牲者の冥福を祈り、参加者が約1分間の黙とうをささげた。

式典では、昨年就任した玉城デニー知事が初めての平和宣言を行い、一部はウチナーグチ（沖縄の方言）と英語で表明。「平和を希求する沖縄のチムグクル（真心）を世界に発信するとともに、平和の大切さを正しく次世代に伝えていくことで、国際社会と恒久平和の実現に貢献する」と誓った。



沖縄全戦没者追悼式で平和宣言を読み上げる

沖縄県の玉城デニー知事＝23日午後、同県糸満市の平和祈念公園

また、米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設の賛否を問う2月の県民投票で反対が多数を占めたことに言及。「結果を無視し工事を強行する政府の対応は、民意を尊重せず地方自治をないがしろにするものだ」と批判し、移設断念と対話による解決を求めた。

首相はあいさつで、米軍基地返還に伴う跡地利用を促進するとした上で、「基地負担軽減に全力を尽くし、沖縄の振興を前に進めていく」と述べた。

糸満市立兼城小6年の山内玲奈さん（11）が自作の詩「本当の幸せ」を朗読。平和祈念資料館（糸満市）で感じたことを踏まえ、戦争のない日常の尊さと恒久平和の決意を訴えた。

74年前の6月23日は、国内最大の地上戦となった沖縄戦で組織的戦闘が終結した日とされる。犠牲者名を刻んだ平和祈念公園内の「平和の礎（いしじ）」には、今年新たに42人が追加され、刻銘者数は計24万1566人となった。

沖縄戦74年、犠牲者追悼 令和初の「慰霊の日」平和願う

2019/6/23 13:00 (JST)共同通信社



沖縄全戦没者追悼式で献花

を終えた玉城デニー知事（右から2人目）ら＝23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦で20万人超となった戦没者を追悼する「慰霊の日」を迎えた。74年前のこの日、旧日本軍が組織的な戦闘を終えたとされる。最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園で、恒久平和を願う「沖縄全戦没者追悼式」（県など主催）が営まれた。

5月1日に天皇陛下が即位されて令和の新時代になってから、初めての式典。参加者は正午に1分間黙とう。玉城デニー知事は方言や英語を交えた平和宣言で、政府が進める米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設について「断念を強く求める」と述べた。



「慰霊の日」を前に、沖縄県糸満市の平和

祈念公園の夜空に浮かび上がった「平和の光の柱」＝22日夜

首相、辺野古移設の推進を明言 「一日も早く」

2019/6/23 16:57 (JST)共同通信社



沖縄全戦没者追悼式を終え、記者団の取材に答

える安倍首相＝23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園

安倍晋三首相は23日、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古移設に関し「移設は基地を増やすものではない。一日も早い全面返還に向けて全力で取り組みたい」と述べ、辺野古移設を進める方針を改めて示した。同県糸満市で沖縄全戦没者追悼式に出席後、記者団に述べた。

首相は「基地負担の軽減は政府の大きな責務だ」と強調。「普

天間基地が、危険なまま置き去りにされることは絶対に避けなければならない」と指摘した。

沖縄の米軍施設の整理・縮小計画を記した日米特別行動委員会最終報告の見直しに関し「合意に基づいて一つ一つ結果を出していきたい」と否定的な考えを示した。



国立沖縄戦没者墓苑で献花を終えた安倍首相（右）。左は沖縄県の玉城デニー知事＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

安倍首相、辺野古移設を推進＝「一日も早い普天間返還」

時事通信 2019年06月23日15時07分

安倍晋三首相は23日、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設について、「辺野古への移設は基地を増やすものではない。一日も早い普天間飛行場の全面返還に向けて、皆さまの理解を得つつ、全力で取り組んでいきたい」と述べ、移設を推進する考えを強調した。同県糸満市で記者団の質問に答えた。

首相は移設の理由に関し「学校や住宅地で囲まれた、世界で最も危険と言われる普天間基地の固定化により危険なまま置き去りにされることは絶対に避けなければならない」と語った。

JNN6月23日15時31分

安倍首相、普天間基地の辺野古移設に改めて理解求める

沖縄県を訪問した安倍総理は、アメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設について、「1日も早い全面返還に向け全力で取り組む」と改めて理解を求めました。

「学校や住宅で囲まれた世界で最も危険といわれる普天間基地の固定化により、危険なまま、置き去りにされることは絶対に避けなければなりません」（安倍首相）

沖縄での「慰霊の日」の式典に出席した安倍総理は、アメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設について「基地を増やすものではない」と理解を求めた上で、「1日も早い普天間基地の全面返還に向けて全力で取り組む」と辺野古への移設の方針に変わりが無い考えを改めて示しました。

その上で、「基地負担の軽減は政府の大きな責務であり、沖縄の皆さんの思いを真摯に受け止めて全力を尽くす」と強調しました。

沖縄慰霊の日 安倍首相が挨拶 「基地負担軽減に全力」

毎日新聞 2019年6月23日12時50分(最終更新 6月23日17時27分)



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安倍晋三首相＝沖

縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午後0時41分、森園道子撮影

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者らを追悼する「慰霊の日」を迎えた。旧日本軍による組織的戦闘の終結から74年。最後の激戦地だった沖縄県糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園では、県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」があった。安倍晋三首相のあいさつは次の通り。

令和元年・沖縄全戦没者追悼式が執り行われるに当たり、沖縄戦において、戦場に倒れた御霊（みたま）、戦禍に遭われ亡くなられた御霊に向かい、謹んで哀悼の誠を捧（ささ）げます。

先の大戦において、ここ沖縄は、苛烈を極めた地上戦の場となりました。20万人もの尊い命が失われ、この地の誇る美しい自然、豊かな文化は、容赦なく破壊されました。全ての戦没者の無念、御遺族の方々の言葉に表し得ない悲しみ、沖縄が負った癒えることのない深い傷を思うとき、胸塞がる気持ちを禁じ得ません。

沖縄戦から74年。犠牲となった方々が送るはずであったそれぞれの未来に思いを致し、こうした尊い犠牲の上に、今日、私たちが享受する平和と繁栄がある。そのことを改めて深く噛（か）み締めながら、静かに頭（こうべ）を垂れたいと思います。



令和元年沖縄全戦没者追悼式で献花す

る安倍晋三首相＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午後（代表撮影）

我が国は、戦後一貫して、平和を重んじる国家として、ひたすらに歩んでまいりました。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは令和の時代においても決して変わることはありません。平和で、希望に満ち溢（あふ）れる新たな時代を創り上げていく。そのことに不断の努力を重ねていくことを、改めて、御霊にお誓いいたします。

沖縄の方々には、永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいております。この現状は、何としても変えていかなければなりません。政府として、基地負担の軽減に向けて、一つ一つ、確実に、結果を出していく決意であります。

昨年引き渡しがなされた西普天間住宅地区跡地は、嘉手納以南の土地の返還計画に基づき実現した初の大規模跡地であり、基地の跡地が生まれ変わる成功例として、県民の皆様に実感していただけるよう、跡地利用の取り組みを加速します。

引き続き、「できることはすべて行う」、「目に見える形で実現する」との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしてまいります。

美しい自然に恵まれ、アジアの玄関口に位置する沖縄は、今日、その優位性と潜在力を存分に活（い）かし、大きな発展を遂げています。出生率は日本一、沖縄に魅せられて訪れた観光客は昨年度約1000万人と、6年連続で過去最高を更新しました。沖縄が日本を牽引（けんいん）し、21世紀の「万国津梁」として世界

の架け橋となる。今、それが現実のものとなりつつあります。この流れを更に加速させるため、私が先頭に立って、沖縄の振興をしっかりと前に進めてまいります。

結びに、この地に眠る御霊の安らかならんこと、御遺族の方々の御平安を、心からお祈りし、私の挨拶（あいさつ）といたします。

「平和希求する沖縄のチムグクルを世界に」玉城知事が平和宣言 英語、ウチナーグチも

毎日新聞 2019年6月23日 12時48分(最終更新 6月23日 17時26分)



追悼式で平和宣言する玉城デニー知事

＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午後0時26分、森園道子撮影

戦火の嵐吹きすさび、灰燼（かいじん）に帰した「わたした島ウチナー」。

県民は、想像を絶する極限状況の中で、戦争の不条理と残酷さを身をもって体験しました。

あれから74年。忌まわしい記憶に心を閉ざした戦争体験者の重い口から、後世に伝えようと語り継がれる証言などに触れるたび、人間が人間でなくなる戦争は、二度と起こしてはならないと、決意を新たにしています。

戦後の廃虚と混乱を乗り越え、人権と自治を取り戻すべく米軍占領下を生き抜いた私たちウチナーンチュ。その涙と汗で得たものが、社会を支え希望の世紀を拓（ひら）くたくましい営みをつないできました。

現在、沖縄は、県民ならびに多くの関係者の御尽力により、一歩一歩着実に発展を遂げつつあります。

しかし、沖縄県には、戦後74年が経過してもなお、日本の国土面積の約0・6%に、約70・3%の米軍専用施設が集中しています。広大な米軍基地は、今や沖縄の発展可能性をフリーズさせていると言わざるを得ません。

復帰から47年の間、県民は、絶え間なく続いている米軍基地に起因する事件・事故、騒音等の環境問題など過重な基地負担による生命の不安を強いられています。今年4月には、在沖海兵隊所属の米海軍兵による悲しく痛ましい事件が発生しました。

県民の願いである米軍基地の整理縮小を図るとともに県民生活に大きな影響を及ぼしている日米地位協定の見直しは、日米両政府が責任を持って対処すべき重要な課題です。

国民の皆様には、米軍基地の問題は、沖縄だけの問題ではなく、我が国の外交や安全保障、人権、環境保護など日本国民全体が自

ら当事者であるとの認識を持っていただきたいと願っています。

我が県においては、日米地位協定の見直し及び基地の整理縮小が問われた1996年の県民投票から23年を経過して、今年2月、辺野古埋め立ての賛否を問う県民投票が実施されました。

その結果、圧倒的多数の県民が辺野古埋め立てに反対していることが、明確に示されました。

それにもかかわらず、県民投票の結果を無視して工事を強行する政府の対応は、民主主義の正当な手続きを経て導き出された民意を尊重せず、なおかつ地方自治をも蔑（ないがし）ろにするものであります。

政府におかれては、沖縄県民の大多数の民意に寄り添い、辺野古が唯一との固定観念にとらわれず、沖縄県との対話による解決を強く要望いたします。

私たちは、普天間飛行場の一日も早い危険性の除去と、辺野古移設断念を強く求め、県民の皆様、県外、国外の皆様と民主主義の尊厳を大切にしたいを共有し、対話によってこの問題を解決してまいります。

時代が「平成」から「令和」へと移り変わる中、世界に目を向けると、依然として、民族や宗教の対立などから、地域紛争やテロの脅威にさらされている国や地域があります。

貧困、難民、飢餓、地球規模の環境問題など、生命と人間の基本的な人権を脅かす多くの課題が存在しています。

他方、朝鮮半島を巡っては、南北の首脳会談や米朝首脳会談による問題解決へのプロセスなど、対話による平和構築の動きもみられます。

真の恒久平和を実現するためには、世界の人々が更に相互理解に努め、一層協力・調和していかなければなりません。

沖縄は、かつてアジアの国々との友好的な交流や交易を謳（うた）う「万国津梁（ばんこくしんりょう）」の精神に基づき、洗練された文化を築いた琉球王国時代の歴史を有しています。

平和を愛する「守禮（しゅれい）の邦（くに）」として、独特の文化とアイデンティティーを連綿と育んできました。

私たちは、先人たちから脈々と受け継いだ、人を大切にしたい琉球文化を礎（いしずえ）に、平和を希求する沖縄のチムグクルを世界に発信するとともに、平和の大切さを正しく次世代に伝えていくことで、一層、国際社会とともに恒久平和の実現に貢献する役割を果たしてまいります。

本日、慰霊の日に当たり、国籍や人種の別なく、犠牲になられた全ての御霊（みたま）に心から哀悼の誠を捧（ささ）げるとともに、全ての人の尊厳を守り誰一人取り残すことのない多様性と寛容性にあふれる平和な社会を実現するため、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

御元祖（うぐわんす）から譲（ゆじ）り受きてい、太平（ていふい）、平和（へい）世願（せいはん）い愛（あい）さしつちやる肝心（かんしん）（ちむぐくる）、肝清（かんじやう）（ちむちゆら）さる沖縄人（うちなーんちゅ）ぬ精神（しんせい）（たまし）や子孫（こわんまが）んかい受け取（う）らさねーないびらん。

幾世（いくせい）（いちぬゆー）までいん悲惨（ひはん）（あわりくり）さる戦争（せんそう）（いくさ）ぬねーらん、心安（あんあん）（くくるや）しく暮らさりーる世界（せかい）

けー) んでいし、皆 (んな) さーに構築 (ちゅくてい) いかんと
一ないびらん。

わした沖縄御万人 (うちなーうまんちゅ) と共 (とうむ) に努
(ちとう) み尽 (ち) くち行ちゆる思 (うむ) いやいびーん。

We must pass down Okinawa's warm heart we call
"Chimugukuru" and its spirit of peace, inherited from our
ancestors, to our children and grandchildren. We will endeavor
to forge a world of everlasting peace. I am determined to work
together with the people of Okinawa.

※方言及び英語の訳

先人から受け継いだ、平和を愛する沖縄のチムグクル(こころ)
を後世(子や孫)に伝えなければなりません。

いつまでも平和で安心した世界をみんなで築いていかなけれ
ばなりません。

沖縄県民の皆さんと共に努力していくことを決意します。

沖縄慰霊の日 追悼式で玉城知事が政府批判 安倍首相「負担 軽減に全力」

毎日新聞 2019年6月23日 11時53分(最終更新 6月23日 17
時27分)



沖縄全戦没者追悼式を前に安倍晋三

首相(左)を出迎え、並んで会場に入る沖縄県の玉城デニー知事
(右)＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午前
11時47分、津村豊和撮影

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者らを追悼する
「慰霊の日」を迎えた。旧日本軍による組織的戦闘の終結から74
年。最後の激戦地だった沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈
念公園では、県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」があった。
玉城(たまき)デニー知事は就任後初となる「平和宣言」で、米
軍普天間飛行場(宜野湾市)の県内移設に伴って名護市辺野古沿
岸部の埋め立てを進める政府を強く批判した。

沖縄戦は激しい地上戦が約3カ月続き、県民の4人に1人が
亡くなったとされる。追悼式には安倍晋三首相や遺族らも参列し
た。

平和宣言で玉城知事は「県民は想像を絶する極限状況の中で、
戦争の不条理と残酷さを体験した。人間が人間でなくなる戦争は
二度と起こしてはならない」と不戦の決意を述べた。

玉城知事は戦後74年の今も全国の米軍専用施設の約7割が沖
縄に集中している現状にも言及。2月の県民投票で辺野古の埋め
立て反対が7割を超えたことを踏まえ、「県民投票の結果を無視
して工事を強行する政府の対応は民意を尊重せず、地方自治をも
ないがしろにするものだ」と指弾した。

そのうえで政府に対して「県民の大多数の民意に寄り添い、辺
野古が唯一との固定観念にとらわれず、県との対話による解決を

強く要望する」と求めた。また、本土の人たちに向けて「米軍基
地の問題は沖縄だけの問題ではなく、我が国の外交や安全保障、
人権など、国民全体が当事者であるとの認識を持っていただきた
い」と呼び掛けた。

結びにはウチナーグチ(沖縄の言葉)と英語で「平和を愛する
沖縄のチムグクル(こころ)を子や孫に伝えなければならない」
と訴えた。

一方、安倍首相は「戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓
いは令和の時代においても決して変わることはない」とあいさつ。
米軍基地が沖縄に集中する現状を「何としても変えていかなけれ
ばならない」と指摘し、「『できることは全て行う』との方針の下、
基地負担軽減に全力を尽くす」と強調した。辺野古移設につい
ては今年も触れなかった。

沖縄戦などの戦没者の名を国籍や民間人、軍人の区別なく刻ん
だ平和祈念公園内の「平和の礎(いしじ)」には今年、新たに韓
国籍2人を含む42人の名前が刻銘された。二重刻銘による削除
者も1人いて、総刻銘数は24万1566人となった。【遠藤孝康】

沖縄慰霊の日、首相「負担軽減に向けて結果出す」

日経新聞 2019/6/23 13:05 (2019/6/23 14:09 更新)



沖縄全戦没者追悼式で黙とうする

参加者(23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園)

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦で犠牲になった人々を
悼む令和初の「慰霊の日」を迎えた。74年前のこの日、多数の
住民を巻き込んだ地上戦の末、旧日本軍の組織的戦闘が終結した
とされる。最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園で
は「沖縄全戦没者追悼式」が開かれ、参加者は犠牲者の冥福を祈
り、平和への誓いを新たに誓った。

式典には遺族のほか安倍晋三首相や玉城デニー知事らが参列。

20万人を超える犠牲者の鎮魂を祈り、黙とうをささげた。

玉城知事は平和宣言で、米軍普天間基地(宜野湾市)の名護市辺
野古移設を巡る今年2月の県民投票で反対が7割を超えたこと
に触れ「政府には県民の大多数の民意に寄り添い、辺野古が唯一
との固定観念にとらわれず、県との対話による解決を強く要望す
る」と訴えた。



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安

倍首相(23日、沖縄県糸満市の平和祈念公園)

安倍首相は式典で「米軍基地の集中による大きな負担は変えな
ければならない。負担の軽減に向けて確実に結果を出していく決意
だ」と述べた。

首相は式典後、記者団に「沖縄の負担軽減は政府の大きな責務だ」と述べた上で、辺野古移設について「移設は基地を増やすものではない。一日も早い全面返還に向けて取り組みたい」と説明。「世界で最も危険といわれる普天間基地が危険なまま置き去りにされることは絶対に避けなければならない」と強調した。

式典では糸満市立小 6 年の山内玲奈さん (11) が平和の詩を朗読。令和の幕開けを受け「新しい時代が始まった。(戦禍を) 伝え継ぐことが私たちの使命だ」と訴えた。

沖縄戦の戦没者を刻む「平和の礎 (いしじ)」には今年新たに 42 人の氏名が刻銘され、総数は 24 万 1566 人となった。

首相「移設は基地を増やすものではない」 辺野古移設推進を明言 琉球新報 2019 年 6 月 23 日 15:35



記者の質問に答える安倍晋三首相＝

23 日午後、糸満市の平和祈念公園 (喜瀬守昭撮影)

安倍晋三首相は 23 日、米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設について「移設は基地を増やすものではない。一日も早い全面返還に向けて皆さんの理解を得つつ、全力で取り組みたい」と述べ、辺野古移設を推進する考えを改めて示した。糸満市摩文仁で開催された沖縄全戦没者追悼式に出席後、記者団の取材に応じた。

2 月の県民投票で辺野古埋め立て反対が多数を占めたことへの評価は避け、「学校や住宅に囲まれた世界で最も危険と言われる普天間基地が危険なまま置き去りにされることは絶対に避けなければならない」と述べた。【琉球新報電子版】

「うそだ」「言葉は要らない」 沖縄慰霊の日・首相あいさつにヤジ飛ぶ

毎日新聞 2019 年 6 月 23 日 20 時 45 分(最終更新 6 月 23 日 22 時 50 分)



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安倍晋三首相＝

沖縄県糸満市の平和祈念公園で 2019 年 6 月 23 日午後 0 時 41 分、森園道子撮影

追悼式で「基地負担の軽減に全力を尽くす」と強調した安倍晋三首相に、会場の参列者からは「うそだ」「言葉は要らない」と激しいやじが飛んだ。米軍普天間飛行場 (沖縄県宜野湾市) の県内移設で名護市辺野古沿岸部の埋め立てを進める政府に対し、県民の強い反発が噴き出した形だ。

沖縄戦の追悼式で安倍首相のあいさつに対してやじや怒号が飛ぶのは、移設反対の圧倒的な民意を受けて誕生した翁長雄志 (おながたけし) 知事 (昨年 8 月に死去) が就任後初めての平和宣言で移設中止を求めた 2015 年から続いている。



沖縄全戦没者追悼式を前に安倍晋三首相 (手前左) を出迎え、並んで会場に入る沖縄県の玉城デニー知事 (同右) ＝

沖縄県糸満市の平和祈念公園で 2019 年 6 月 23 日午前 11 時 47 分、津村豊和撮影

安倍首相の参列は 13 年から 7 年連続となるが、今年も辺野古移設には触れなかった。追悼式に出席した県議は「首相のあいさつは毎年ほぼ同じ。本来は厳粛に過ごしたいが、声を上げざるをえないという沖縄の状況がある」と語る。

西原町の女子大学生 (20) は「首相は負担軽減の努力をアピールしていたが、辺野古問題には触れず、はぐらかされていると感じた」と話した。【遠藤孝康】

沖縄慰霊の日、首相「負担軽減に向けて結果出す」

日経新聞 2019/6/23 13:05 (2019/6/23 14:09 更新)



沖縄全戦没者追悼式で黙とうする参列者 (23 日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園)

沖縄県は 23 日、太平洋戦争末期の沖縄戦で犠牲になった人々を悼む令和初の「慰霊の日」を迎えた。74 年前のこの日、多数の住民を巻き込んだ地上戦の末、旧日本軍の組織的戦闘が終結したとされる。最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では「沖縄全戦没者追悼式」が開かれ、参加者は犠牲者の冥福を祈り、平和への誓いを新たにした。

式典には遺族のほか安倍晋三首相や玉城デニー知事らが参列。20 万人を超える犠牲者の鎮魂を祈り、黙とうをささげた。

玉城知事は平和宣言で、米軍普天間基地 (宜野湾市) の名護市辺野古移設を巡る今年 2 月の県民投票で反対が 7 割を超えたことに触れ「政府には県民の大多数の民意に寄り添い、辺野古が唯一との固定観念にとらわれず、県との対話による解決を強く要望する」と訴えた。



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安倍首相 (23 日、沖縄県糸満市の平和祈念公園)

安倍首相は式典で「米軍基地の集中による大きな負担は変えな

ればならない。負担の軽減に向けて確実に結果を出していく決意だ」と述べた。

首相は式典後、記者団に「沖縄の負担軽減は政府の大きな責務だ」と述べた上で、辺野古移設について「移設は基地を増やすものではない。一日も早い全面返還に向けて取り組みたい」と説明。「世界で最も危険といわれる普天間基地が危険なまま置き去りにされることは絶対に避けなければならない」と強調した。

式典では糸満市立小6年の山内玲奈さん(11)が平和の詩を朗読。令和の幕開けを受け「新しい時代が始まった。(戦禍を)伝え継ぐことが私たちの使命だ」と訴えた。

沖縄戦の戦没者を刻む「平和の礎(いしじ)」には今年新たに42人の氏名が刻銘され、総数は24万1566人となった。

安倍首相、辺野古に触れず 沖縄全戦没者追悼式

琉球新報 2019年6月23日 12:54



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安倍晋三首相=23日、糸満市摩文仁

沖縄全戦没者追悼式のあいさつで、安倍晋三首相は「沖縄の方々は、永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいている。この現状は、なんとしても変えていかねばならない」と述べ、沖縄の基地負担軽減に向けて取り組む決意を示したが、辺野古新基地建設については言及しなかった。

安倍首相は「我が国は、戦後一貫して、平和を重んじる国家として、ひたすらに歩んできた。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは令和の時代においても決して変わることはない。平和で、希望に満ちあふれる新たな時代を創り上げていく。そのことに不断の努力を重ねていく」と述べ、戦争を繰り返さないとの決意を示した。

沖縄の基地負担の軽減については西普天間住宅地区など跡地利用の取り組みの加速に触れた上で、「引き続き、『できることはすべて行う』、『目に見える形で実現する』との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしていく」と述べた。

沖縄振興については「21世紀の『万国津梁』として世界の架け橋となる。今、それが現実のものとなりつつある。この流れをさらに加速するため、私が先頭に立って、沖縄の振興をしっかりと前に進めていく」との考えを示した。【琉球新報電子版】

「基地負担軽減に結果出す」首相、沖縄慰霊式で決意「帰れ！」のヤジも

産経新聞 2019.6.23 14:32

安倍晋三首相は23日、沖縄県糸満市を訪れ、先の大戦の沖縄戦で犠牲となった戦没者を追悼する「沖縄全戦没者追悼式」に出席した。首相はあいさつで「沖縄に米軍基地が集中する現状を変えなければならない。負担軽減に向けて結果を出す」と述べた。首相のあいさつの途中、会場からは「安倍は帰れ！」などのやじが飛んだ。

首相は追悼式後、記者団に対し、米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古移設について「移設は基地を増やすものではない。一日も早い全面返還に向けて取り組みたい」と語り、辺野古移設を進める方針を重ねて示した。

首相が追悼式で述べたあいさつの要旨は次の通り。

◇

先の大戦で、沖縄は苛烈を極めた地上戦の場となった。20万人もの尊い命が失われ、この地の誇る美しい自然、豊かな文化は容赦なく破壊された。全ての戦没者の無念、ご遺族の言葉に表し得ない悲しみ、沖縄が負った癒えることのない深い傷を思うとき、胸ふさがる気持ちを禁じ得ない。

わが国は戦後一貫して平和を重んじる国家として歩んできた。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは令和の時代も決して変わることはない。平和で、希望に満ちあふれる新たな時代を創り上げていく。そのことに不断の努力を重ねていくことを改めて御霊(みたま)に誓う。

沖縄の方々には長きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担ってもらっている。この現状は何としても変えなければならない。政府として基地負担の軽減に向けて、一つ一つ確実に結果を出していく決意だ。

昨年引き渡しがなされた西普天間住宅地区跡地は、嘉手納以南の土地の返還計画に基づき実現した初の大規模跡地であり、基地の跡地が生まれ変わる成功例として、県民に実感していただける跡地利用の取り組みを加速する。引き続き「できることはすべて行う」「目に見える形で実現する」との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしていく。

美しい自然に恵まれ、アジアの玄関口に位置する沖縄は今日、その優位性と潜在力を存分に生かし、大きな発展を遂げている。出生率は日本一、沖縄に魅せられて訪れた観光客は昨年度約1千万人と、6年連続で過去最高を更新した。この流れをさらに加速させるため、私が先頭に立って沖縄の振興をしっかりと前に進めていく。

沖縄「慰霊の日」続く政治利用 「祈りの場なのに…」

産経新聞 2019.6.23 19:57

23日に沖縄県糸満市で開かれた沖縄全戦没者追悼式は、さながら政治集会の様相を呈した。玉城デニー知事が米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古移設に関し「県民の圧倒的民意に寄り添い、辺野古が唯一との固定観念にとらわれず県との対話による解決を強く要望する」と述べると、会場には拍手と指笛とともに「そうだ」「よーし」との声が飛び交った。

安倍晋三首相も出席した式典で知事が政治的要求を突き付ける「平和宣言」は、翁長雄志(おなが・たけし)前知事の在任時から繰り返されてきた。今回は玉城氏が知事に就任して初の式典だったが、「慰霊の日」を政治利用する悪弊は断ち切れなかった。

玉城氏による「県民の圧倒的民意」の誇示も政治的思惑が垣間見える。2月の県民投票では辺野古移設への反対が投票者数の7割以上を占めたが、投票率は52%だった。有権者の6割以上は反対しておらず、評価は必ずしも定まっていない。

会場の一部では、式典が始まる前から異様な怒声が飛び交っていた。

「安倍は帰れ！ 辺野古新基地建設は許さん！ 憲法改悪許さんぞ！」

「お前らが帰れ！」

公園入り口には首相の到着を待ち構えるようにマスクやサンングラスで顔を隠した「市民」ら数十人が陣取った。それに反発する団体との間でやじの応酬が続いたが、首相は既に別の入り口から会場入りを済ませていた。

式典会場では、県職員らがプラカード掲示などの示威行為の禁止を呼びかけ、目を光らせたためか、中盤まで静かに進化した。ただ、首相があいさつを始めると、「帰れ！」「恥知らず！」「辺野古を止めてから言え！」などのやじが相次いだ。

これも翁長時代からの光景だ。浦添市の無職男性（80）は取材に対し「首相は沖縄の米軍基地を縮小するといっているが、やっていることが違う。首相に県民の思いを直接伝えられるのは式典しかないから、やじも仕方がない」と一定の理解を示した。

しかし、厳粛な式典を妨害する行為だととらえる出席者は少なくない。

糸満市の遺族会幹部（81）は「みんな慰霊のために来ているのに邪魔している」と眉をひそめた。同市の高校1年の女子生徒（15）は「やじを飛ばすと、会場の人がやじに耳を傾けてしまう。亡くなられた方々に祈りをささげる場所なので、おかしい」とあきれ顔だった。

休暇を利用して式典に初めて参加した三重県菟野町の男性（36）は「隣の人が大声を上げたせいで、首相の言葉が頭に入らなかった。式典に参加した子供たちに見せられない光景だった」と苦笑した。公園にいた派遣社員の男性（25）は「やじを飛ばすのは一部の基地反対の活動家に過ぎないですよ」と冷ややかだった。

県がこうした行為を黙認しているわけではない。式典会場には「大声等をあげる場合は退席してもらいます」と書かれた看板も置かれた。実際にやじを飛ばした出席者には、関係者が退去を促した。

だが、肝心の玉城氏の態度は、はっきりしない。玉城氏は式典後、記者団に「戦没者の御霊（みたま）に哀悼の誠をささげる式典なので、静謐な中で式典が行われる方が望ましい」と述べつつ、こう付け加えた。

「参加されている方々にはそれぞれの思いがある。そういう思いを持っていらっしゃるのかなと感じた」

（杉本康士、奥原慎平）

しんぶん赤旗 2019年6月24日(月)

平和愛する心 子や孫へ 沖縄「慰霊の日」 デニー知事宣言に声援

太平洋戦争末期の激しい地上戦で20万人超の命が失われた沖縄戦から74年の「慰霊の日」を迎えた沖縄県は23日、糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園で「沖縄全戦没者追悼式」を開きました。横殴りの雨の中でも、戦没者追悼のために5100

人が参列し、恒久平和の願いと、沖縄に新基地は造らせないと力強い思いを新たにしました。



（写真）「平和の礎」を訪れ

刻銘板の名前をなぞる家族＝23日、沖縄県糸満市

主催は県と県議会。平和宣言で玉城デニー知事が沖縄の方言と英語で、先人から受け継いだ平和を愛する「沖縄のチムグクル（こころ）」を子や孫に伝え、平和な世界を築こうと呼びかけると、「そうだ！」の声援や指笛が起きました。

デニー知事は、今年2月の県民投票で、名護市辺野古米軍新基地建設のための埋め立てに、県民が圧倒的反対の民意を明確に示したと強調。「工事を強行する政府の対応は、民主主義の正当な手続きを経て導き出された民意を尊重せず、地方自治をもないがしろにする」と批判しました。

デニー知事が、政府に対して「対話による解決」を求めると参列者からひととき大きな拍手が起きました。

安倍晋三首相や衆参両院議長らも出席。新基地建設に触れないで「沖縄の基地負担軽減に全力を尽くす」とあいさつした安倍首相に対し、「うそつけ！」などの怒りの声が上がりました。

沖縄県遺族連合会の宮城篤正会長は「基地から発生する事件や事故が後を絶たない。このような状況を一日も早く解消されるよう強く願う」と述べました。

糸満市立兼城（かねぐすく）小学校6年の山内玲奈（れな）さんが、平和の詩「本当の幸せ」を朗読しました。

日本共産党の赤嶺政賢衆院議員など、沖縄選出の国会議員らも参列しました。

【全文】玉城デニー知事の平和宣言（2019年慰霊の日）

琉球新報 2019年6月23日 12:40



平和宣言する玉城デニー知事＝23日、糸

満市摩文仁の平和祈念公園

戦火の嵐吹きすさび、灰燼に帰した「わたした島ウチナー」。県民は、想像を絶する極限状況の中で、戦争の不条理と残酷さを身をもって体験しました。

あれから、74年。忌まわしい記憶に心を閉ざした戦争体験者の重い口から、後世に伝えようと語り継がれる証言などに触れるたび、人間が人間でなくなる戦争は、二度と起こしてはならないと、決意を新たにします。

戦後の廢墟と混乱を乗り越え、人権と自治を取り戻すべく米軍

占領下を生き抜いた私達ウチナーンチュ。その涙と汗で得たものが、社会を支え希望の世紀を拓くたくましい営みをつないできました。

現在、沖縄は、県民ならびに多くの関係者の御尽力により、一歩一歩着実に発展を遂げつつあります。

しかし、沖縄県には、戦後74年が経過してもなお、日本の国土面積の約0・6パーセントに、約70・3パーセントの米軍専用施設が集中しています。広大な米軍基地は、今や沖縄の発展可能性をフリーズさせていると言わざるを得ません。

復帰から47年の間、県民は、絶え間なく続いている米軍基地に起因する事件・事故、騒音等の環境問題など過重な基地負担による生命の不安を強いられています。今年4月には、在沖米海兵隊所属の米海軍兵による悲しく痛ましい事件が発生しました。

県民の願いである米軍基地の整理縮小を図るとともに県民生活に大きな影響を及ぼしている日米地位協定の見直しは、日米両政府が責任を持って対処すべき重要な課題です。

国民の皆様には、米軍基地の問題は、沖縄だけの問題ではなく、我が国の外交や安全保障、人権、環境保護など日本国民全体が自ら当事者であるとの認識を持っていただきたいと願っています。

我が県においては、日米地位協定の見直し及び基地の整理縮小が問われた1996年の県民投票から23年を経過して、今年2月、辺野古埋立ての賛否を問う県民投票が実施されました。

その結果、圧倒的多数の県民が辺野古埋立てに反対していることが、明確に示されました。

それにもかかわらず、県民投票の結果を無視して工事を強行する政府の対応は、民主主義の正当な手続きを経て導き出された民意を尊重せず、なおかつ地方自治をも蔑ろにするものであります。

政府におかれては、沖縄県民の大多数の民意に寄り添い、辺野古が唯一との固定観念にとらわれず、沖縄県との対話による解決を強く要望いたします。

私たちは、普天間飛行場の一日も早い危険性の除去と、辺野古移設断念を強く求め、県民の皆様、県外、国外の皆様と民主主義の尊厳を大切にしたい思いを共有し、対話によってこの問題を解決してまいります。

時代が「平成」から「令和」へと移り変わる中、世界に目を向けると、依然として、民族や宗教の対立などから、地域紛争やテロの脅威にさらされている国や地域があります。

貧困、難民、飢餓、地球規模の環境問題など、生命と人間の基本的な人権を脅かす多くの課題が存在しています。

他方、朝鮮半島を巡っては、南北の首脳会談や米朝首脳会談による問題解決へのプロセスなど、対話による平和構築の動きもみられます。

真の恒久平和を実現するためには、世界の人々が更に相互理解に努め、一層協力・調和していかなければなりません。

沖縄は、かつてアジアの国々との友好的な交流や交易を謳う「万国津梁」の精神に基づき、洗練された文化を築いた琉球王国時代の歴史を有しています。

平和を愛する「守禮の邦」として、独特の文化とアイデンティティを連綿と育んできました。

私たちは、先人達から脈々と受け継いだ、人を大切にする琉球文化を礎に、平和を希求する沖縄のチムグクルを世界に発信するとともに、平和の大切さを正しく次世代に伝えていくことで、一層、国際社会とともに恒久平和の実現に貢献する役割を果たしてまいります。

本日、慰霊の日に当たり、国籍や人種の別なく、犠牲になられた全ての御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、全ての人の尊厳を守り誰一人取り残すことのない多様性と寛容性にあふれる平和な社会を実現するため、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

御先祖から譲り受けてい、太平（平和）世願い愛さしつちやる肝心、肝清さる沖縄人め精神や子孫んかい受け取らさねないびらん。

幾世までいん悲惨さる戦争ぬねーらん、心安しく暮らさる一世界んでいし、皆さーに構築いいかんとないびらん。

わした沖縄御万人と共に努み尽くち行ちゆる思いやいびーん。

We must pass down Okinawa's warm heart we call "Chimugukuru" and its spirit of peace, inherited from our ancestors, to our children and grandchildren.

We will endeavor to forge a world of everlasting peace.

I am determined to work together with the people of Okinawa.

令和元年6月23日

沖縄県知事 玉城デニー

【全文】安倍晋三首相あいさつ（2019年慰霊の日）

琉球新報 2019年6月23日 12:59



沖縄全戦没者追悼式であいさつする安倍晋三首相

三首相＝23日、糸満市摩文仁

沖縄全戦没者追悼式が執り行われるに当たり、沖縄戦において、戦場に斃れたみ霊、戦禍にあわれ亡くなられたみ霊に向かい、謹んで哀悼の誠をささげます。

先の大戦において、ここ沖縄は、苛烈を極めた地上戦の場となりました。二十万人もの貴い命が失われ、この地の誇る美しい自然、豊かな文化は、容赦なく破壊されました。全ての戦没者の無念、ご遺族の方々の言葉に表し得ない悲しみ、沖縄が負った癒えることのない深い傷を思うとき、胸ふさがる気持ちを禁じ得ません。

沖縄戦から74年。犠牲となった方々が送るはずであったそれぞれの未来に思いを致し、こうした尊い犠牲の上に、今日、私たちが享受する平和と繁栄がある。そのことを改めて深くかみしめながら、静かに頭を垂れたいと思います。

我が国は、戦後一貫して、平和を重んじる国家として、ひたすらに歩んでまいりました。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは令和の時代においても決して変わることはありません。平和で、希望に満ちあふれる新たな時代を創り上げていく。その

ことに不断の努力を重ねていくことを、改めて、み霊にお誓い致します。

沖縄の方々には、永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいております。この現状は、なんとしても変えていかなければなりません。政府として、基地負担の軽減に向けて、一つ一つ、確実に、結果を出していく決意であります。

昨年引き渡しがなされた西普天間住宅地区跡地は、嘉手納以南の土地の返還計画に基づき実現した初の大規模跡地であり、基地の跡地が生まれ変わる成功例として、県民の皆さまに実感していただけるよう、跡地利用の取り組みを加速します。

引き続き、「できることはすべて行う」、「目に見える形で実現する」との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしてまいります。

美しい自然に恵まれ、アジアの玄関口に位置する沖縄は、今日、その優位性と潜在力を存分に生かし、大きな発展を遂げています。出生率は日本一、沖縄に魅せられて訪れた観光客は昨年度約1千万人と、6年連続で過去最高を更新しました。沖縄が日本をけん引し、21世紀の「万国津梁」として世界の架け橋となる。今、それが現実のものとなりつつあります。この流れをさらに加速させるため、私が先頭に立って、沖縄の振興をしっかりと前に進めてまいります。

結びに、この地に眠るみ霊の安らかならんこと、ご遺族の方々のご平安を心からお祈りし、私のあいさつといたします。

令和元年6月23日

内閣総理大臣 安倍晋三

令和時代、幸せいつまでも＝未来に平和伝える詩、小6が朗読— 沖縄慰霊の日

時事通信 2019年06月23日 13時42分



沖縄全戦没者追悼式で、自作の詩を朗読

する糸満市立兼城小6年の山内玲奈さん＝23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園

沖縄「慰霊の日」追悼式では、沖縄県糸満市立兼城小学校6年の山内玲奈さん(11)が、平和の詩「本当の幸せ」を朗読した。昭和、平成、令和と時代が移り変わっても、「みんなが笑顔であすへの希望を持てる平和な時代にしたい」との思いを詩に込めた。

今年5月、学校の平和学習で訪れた糸満市の平和祈念資料館で、子どもが銃で撃たれている写真に胸を突かれた。資料館を出て、目に飛び込んできた美しい海、緑、空の景色に74年前の沖縄の戦場を重ね合わせ、詩に表現した。

昨年亡くなった祖父は沖縄戦経験者だったが、「悲しい記憶を思い出させることはかわいそうだと思い、戦争の話を書くことは

しなかった」。祖父が自ら経験を話すこともなかったが、「平和を願っていたからこそ、とても優しい祖父だったんだろう」と振り返る。

詩を書くに当たり、平和を考えると同時に、幸せについても考えた。「家族と友達と笑い合える毎日こそが／本当の幸せだ／未来に夢を持つことこそが／最高の幸せだ」

令和世代の子どもが増えるにつれ、今後ますます戦争を経験していない世代が増えてくる。しかし、山内さんは詩に強い思いを込めた。「私たちは絶対戦争を起こさないで、未来は平和な社会を作っていくね」。

沖縄慰霊の日 この幸せをいつまでも 「平和の詩」朗読、小6 の山内玲奈さん

毎日新聞 2019年6月23日 06時30分(最終更新 6月23日 14時32分)



「平和の詩」として「本当の幸せ」と題した

詩を朗読する山内玲奈さん＝沖縄県糸満市の市立兼城小学校で2019年6月11日午後4時39分、遠藤孝康撮影

沖縄県糸満市の平和祈念公園で23日に営まれた沖縄全戦没者追悼式で、糸満市立兼城(かねぐすく)小学校6年の山内玲奈(れな)さん(11)が「平和の詩(し)」を朗読した。学校での平和学習で沖縄戦当時の写真を見て、戦争の恐ろしさと平穏な日常のありがたさを思い知った。令和の時代も平和が続いてほしいとの願いを込め、「本当の幸せ」と題した自作の詩を読み上げた。

山内さんの詩は県平和祈念資料館(糸満市)に応募した1097点から朗読作品に選ばれた。

<青くきれいな海 この海は どんな景色を見たのだろうか>

「鉄の暴風」と呼ばれるほど多くの砲弾が島を削り、兵士や住民の命を奪った壮絶な地上戦。平成生まれの山内さんは74年前に繰り広げられた光景を想像し、沖縄の海や大地、空の視点でつづった。



「平和の詩」として「本当の幸せ」と題

した詩を朗読する山内玲奈さん＝沖縄県糸満市の市立兼城小学校で2019年6月11日午後5時2分、遠藤孝康撮影

山内さんは5月、平和学習で県平和祈念資料館を見学した。子

供が撃たれ倒れている沖縄戦の写真を見て「子供たちまでもが戦争に巻き込まれたのか」と衝撃を受けた。「思ったことを書いてごらん」。教諭に言われ、書き出した。

<体験したことはなくとも 戦争の悲さんさを 決して繰り返してはいけないことを 伝え継いでいくことは 今に生きる私たちの使命だ 二度と悲しい涙を流さないために>

沖縄戦を生き残った山内さんの祖父は昨年亡くなった。「悲しい記憶を思い出させるのはかわいそう」と体験を尋ねることはできなかったが、「平和を願っていたからこそ、優しい祖父だったんだろう」と思う。

家族や友達に囲まれ、未来に夢を持つことができる平和な時代に生まれたことを幸せに思う。詩の最後はこう結んだ。

<「命(ぬち) どう宝」 生きているから笑い合える 生きているから未来がある 令和時代 明日への希望を願う新しい時代が始まった この幸せをいつまでも> 【遠藤孝康】

平和の詩全文＝沖縄慰霊の日

沖縄タイムス 2019年06月23日 13時58分

沖縄県主催の沖縄全戦没者追悼式で、糸満市立兼城小学校6年の山内玲奈さん(11)が朗読した詩「本当の幸せ」の全文は次の通り。

青くきれいな海
この海は
どんな景色を見たのだろうか
爆弾が何発も打ちこまれ
ほのおで包まれた町
そんな沖縄を見たのではないだろうか
緑あふれる大地
この大地は
どんな声を聞いたのだろうか
けたたましい爆音
泣き叫ぶ幼子
兵士の声や銃声が入り乱れた戦場
そんな沖縄を聞いたのだろうか
青く澄みわたる空
この空は
どんなことを思ったのだろうか
緑が消え町が消え希望の光を失った島
体が震え心も震えた
いくつもの尊い命が奪われたことを知り
そんな沖縄に涙したのだろうか
平成時代
私はこの世に生まれた
青くきれいな海
緑あふれる大地
青く澄みわたる空しか知らない私
海や大地や空が七十四年前
何を見て
何を聞き

何を思ったのか
知らない世代が増えている
体験したことはなくとも
戦争の悲さんさを
決して繰り返してはいけないことを
伝え継いでいくことは
今に生きる私たちの使命だ
二度と悲しい涙を流さないために
この島がこの国がこの世界が
幸せであるように
お金持ちになることや
有名になることが
幸せではない
家族と友達と笑い合える毎日こそが
本当の幸せだ
未来に夢を持つことこそが
最高の幸せだ
「命どう宝」
生きているから笑い合える
生きているから未来がある
令和時代
明日への希望を願う新しい時代が始まった
この幸せをいつまでも
(表記は原文のまま)。

歴代首相は沖縄「慰霊の日」の追悼式でどんなあいさつをしたのか？

琉球新報 2019年6月23日 10:02



安倍晋三首相＝2017年6月23日

沖縄全戦没者追悼式に参列した歴代首相は近年、あいさつで在沖米軍基地の整理・縮小や基地負担軽減に向けて努力する旨を述べてきた。だが国土面積の0・6%の沖縄に在日米軍専用施設の7割が存在するいびつな状況も変わっていない。さらに政府は基地機能の強化につながる名護市辺野古の新基地建設を強行している。

歴代首相は当初、基地負担軽減には触れず、経済の自立的発展を推進する考えを強調していた。1990年の追悼式で海部俊樹氏が首相として初めて参列。その後、95年に村山富市氏、サミットを控えた2000年に森喜朗氏と続いた。

森氏が首相あいさつで初めて基地負担軽減に言及し、着実な実施を推進すると述べた。01年以降は首相が毎年、追悼式に参加し、沖縄の基地負担軽減を目指す旨をあいさつに盛り込んできた。

安倍晋三首相は1度目の首相時代、07年のあいさつで「県民の切実な声に耳を傾ける」と語り、基地負担軽減を確実に進める

考えを示した。再就任後も沖縄の基地負担軽減に「全力を尽くす」とのあいさつを続けてきた。

米軍属による女性殺害事件があった16年の式辞では事件に触れ「非常に強い憤りを覚えている」と述べて再発防止を誓った。

民主党政権の時代を含めて歴代首相は基地負担軽減に取り組む姿勢を強調してきたが、実際には基地負担軽減は進んでいない。

米軍普天間飛行場移設に伴う辺野古新基地建設を巡っては、県による埋め立て承認撤回を強制的に無効化し、今年2月の県民投票の結果を無視する形で工事を続けている。

首相 辺野古への移設計画の意義を強調

NHK2019年6月23日 15時59分



沖縄県で開かれた戦没者追悼式に出席した安倍総理大臣は記者団に対し、アメリカ軍普天間基地の移設計画について、移されるのは輸送機オスプレイなどの運用機能のみで、騒音被害も軽減されると意義を強調し、基地の全面返還に向けて工事を進める考えを示しました。

この中で安倍総理大臣は、沖縄県と対立が続くアメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設計画について、「移設は基地を増やすものではない。普天間飛行場の3つの機能のうち1つに絞って辺野古に移設し、残りの2つは県外に移設することになった」と述べ、移設先には輸送機オスプレイなどの運用機能のみが移されることを強調しました。

そのうえで、「飛行経路が住宅の上空から海上に移ることによって、住宅防音が必要な世帯はゼロになる。1日も早い普天間基地の全面返還に向けて全力で取り組んでいきたい」と述べ、普天間基地の全面返還の実現に向けて移設工事を進める考えを示しました。

また安倍総理大臣は、沖縄の基地負担について、「普天間飛行場の全面返還の方針はアメリカのトランプ大統領と確認している。アメリカと合意した計画がすべて実現すれば、沖縄の復帰前の状態と比べて約半分が返還されることになる。日米合意に基づいて、一つ一つ結果を出していきたい」と述べました。

首相「沖縄の基地負担軽減に全力尽くす」 戦没者追悼式で

NHK2019年6月23日 13時33分



安倍総理大臣は、沖縄県糸満市で開かれた戦没者追悼式であいさつし、戦争の惨禍を二度と繰り返さない、この誓いは令和の時代でも決して変わることはない」と述べたうえで、沖縄の基地負担の

軽減や地域の振興に引き続き取り組む考えを強調しました。

20万人を超える人が犠牲となった沖縄戦から74年の「慰霊の日」の23日、安倍総理大臣は沖縄県糸満市を訪れ、平和祈念公園にある国立沖縄戦没者墓苑で献花したあと、戦没者追悼式に出席しました。

この中で、安倍総理大臣は「先の大戦において、ここ沖縄は、苛烈を極めた地上戦の場となり、20万人もの尊い命が失われた。沖縄が負った癒えることのない深い傷を思うとき、胸塞がる気持ちを禁じえない。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この誓いは令和の時代においても決して変わることはない」と述べました。そのうえで「沖縄のかたがたには永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいている、この現状は何としても変えていかなければならない。引き続き沖縄の基地負担の軽減に全力を尽くしていく」などと述べ、沖縄の基地負担の軽減と、地域の振興に引き続き取り組む考えを強調しました。

一方、安倍総理大臣はあいさつの中で、政府と沖縄県の間で対立が続く、アメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設計画には触れませんでした。会場では移設に反対するヤジなども聞かれました。

戦争、二度と起こらぬよう＝「平和の礎」で遺族が祈り－沖縄慰霊の日

時事通信2019年06月23日 13時42分



父の名が刻まれた「平和の礎（いしじ）」の

前で、手を合わせる遺族の比嘉永喜さん(左)と妻＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

「慰霊の日」を迎えた23日早朝、沖縄県糸満市摩文仁の追悼式会場では雨が降る中、平和祈念公園内の「平和の礎（いしじ）」に多くの遺族が訪れ、二度と戦争をしないことを誓い、追悼の祈りをささげた。

那覇市で家族4人を亡くした比嘉永喜さん(83)は夫婦で訪れ、祖父が好きだった泡盛を名前の刻まれた石碑に掛けた。「水もない中で頑張ってきたのだから、たっぷり掛けたつもりだ」。妻の美代子さん(80)は涙をこらえながら「どんな時代でも戦争は一般の人を犠牲にする。二度と起こらないように」と祈った。

家族3世代8人で訪れた那覇市の渡嘉敷清次さん(76)は、祖母と母を亡くした。母は食事作りのため外に出たところで爆撃を受けた。渡嘉敷さんは「孫のことを見守ってください」と手を合わせた後、「足腰が立っているうちは来る。生きている人間の使命だから」と話した。



犠牲者の名が刻まれた「平和の礎（いし

じ)に手を合わせる遺族の渡嘉敷清次さん(左端)。家族3世代で訪れた=23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

近くに住む糸満市の福元よねこさん(67)は、義父の親戚が亡くなった。「普段は通り過ぎるけれど、きょうは特別。生きていればいろいろなことができたのに」と涙をぬぐった。親戚の家族は全員亡くなったが、「義父が受け継いだ(碑を守る)役割を、途絶えないようにしたい」と誓った。

「私一人生き残って申し訳ない」と話すのは、沖縄戦で家族5人全員を亡くした那覇市の沢岬正喜さん(80)。父親は防衛隊に徴用され戦死し、母やきょうだいは避難していた壕(ごう)で爆撃を受け亡くなった。

6歳で孤児になり、戦後はおばに育てられた。「何で自分だけ苦しむのか」。幼い頃は、戦争がなければと夜中に自然と涙があふれてくることも数多くあった。沢岬さんは「戦争は二度とやってほしくない。沖縄は平和な島であってほしい」と語った。

沖縄戦 学徒隊の慰霊祭 高齢化で3分の1が運営に影響

NHK2019年6月23日 7時12分



沖縄戦では学徒隊として動員されたおよそ2000人の生徒たちの半数が犠牲になり、それぞれの学校の同窓生が慰霊祭を行ってきましたが、去年までに全体の3分の1を超える7校が高齢化のため慰霊祭をやめたり行政に委ねたりするなど、運営に影響が出ていることがNHKの調査で分かりました。

沖縄戦では「ひめゆり学徒隊」など21の学校の生徒およそ2000人が動員され、戦場の最前線で軍の情報の伝令や看護活動などにあたりましたが、半数が犠牲になりました。

NHKが21校の同窓会などを対象にアンケート調査や聞き取り調査を行ったところ、毎年、同窓生が慰霊祭を行ってきた19校のうち、3分の1を超える7校が、去年までに同窓会の高齢化の影響で慰霊祭をやめたり、行政や社団法人などに運営を委ねたりしていることが分かりました。

また、同窓生による運営が継続されている残りの12校のうち5校も、参加者が減り、規模が縮小していると答えました。さらに、学徒隊の記憶を次世代に継承できているか尋ねたところ、21校のうち10校が「あまりできていない」または「全くできていない」と答えました。

その理由については、今の学校で行われている平和教育の内容が十分ではないと感じていることなどを挙げていて、近い将来、記憶が途絶えかねない現状が浮き彫りになりました。

同窓会慰霊祭をやめた学校

那覇市にあった開南中学校は、同窓会の高齢化のため去年から遺族などが代わりに慰霊祭を運営しています。

開南中学校は戦時中に旧日本軍に校舎が接収され、生徒はばらばらに動員されました。

学校はその後廃校となり、はっきりとした記録が残らなかったた

め、何人が学徒隊として動員され、戦死したのか、詳しい実態はわかっていません。

戦後、卒業生が学徒について調査しましたが、全容はわからないままで、現在はその調査を引き継ぐ人もいません。

調査を行った卒業生の名嘉山廣貞さん(89)は「わたしたちが調査しないと雲散霧消してしまうという思いで調査を行いました。自分も高齢になり記憶が継承されなくても仕方がないと諦めの気持ちです」と話しています。

「鉄の暴風」といわれる激しい地上戦から74年 沖縄「慰霊の日」迎える

毎日新聞2019年6月23日 06時00分(最終更新 6月23日 23時37分)



早朝から平和の礎に手を合わせる

人たち=沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午前7時29分、森園道子撮影

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者らを追悼する「慰霊の日」を迎えた。旧日本軍による組織的戦闘の終結から74年。最後の激戦地だった沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈念公園にある「平和の礎(いしじ)」を遺族らが訪れるなど、沖縄は一日中、平和と鎮魂の祈りに包まれる。

米軍は1945年4月1日に沖縄本島に上陸。「鉄の暴風」といわれる激しい地上戦が展開され、日本軍が本土防衛の時間稼ぎのために持久戦に持ち込んだ結果、多くの住民が巻き込まれた。約3カ月に及ぶ戦闘で日米の計約20万人が犠牲となり、県民の4人に1人が亡くなったとされる。

23日昼には平和祈念公園で県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」が営まれ、玉城(たまき)デニー知事が就任後初の「平和宣言」を読み上げる。安倍晋三首相も参列し、あいさつする。米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古への県内移設を巡って県と政府が真っ向から対立する中、2月の県民投票で埋め立て反対が7割を超えたことを踏まえ、玉城知事は平和宣言で辺野古移設断念を求めるとみられる。

沖縄戦などの戦没者の名を国籍や民間人、軍人の区別なく刻んだ「平和の礎」には今年、新たに韓国籍2人を含む42人の名前が刻銘された。二重刻銘による削除者も1人いて、総刻銘数は24万1566人となった。【遠藤孝康】

沖縄慰霊の日 祈る遺族ら「絶対に戦争繰り返さない」

日経新聞2019/6/23 10:27



雨の中、沖縄戦犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎（いしじ）」を訪れる人たち（23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園）



20万人を超える人が亡くなった沖縄戦から74年がたち、23日、沖縄は、令和になって初めての「慰霊の日」を迎えました。最後の激戦地となった糸満市の平和祈念公園には朝早くから遺族などが訪れ、戦没者を悼み、平和への祈りをささげています。太平洋戦争末期、昭和20年の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で20万人を超える人が犠牲になり、沖縄県民の4人に1人が命を落としました。

沖縄県は旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる6月23日を「慰霊の日」としています。

最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園には朝早くから遺族などが訪れ、戦没者の名前が刻まれた「平和の礎」で花を手向けたり、手を合わせたりしています。

おじを亡くした読谷村の棚原治江さん（77）は「横たわる遺体や、遺体に寄り添う幼子の姿などを見たら思い出がよみがえります。今の沖縄は、変わらず爆音が鳴り響き、74年たっても梅雨が明けられないような気持ちです」と話していました。

沖縄戦から74年がたち、体験者が年々、少なくなっていく中、戦争の記憶をどのように受け継いでいくかが課題となっています。

一方、沖縄戦を経て、アメリカ軍基地が次々と造られて、在日アメリカ軍の専用施設のおよそ7割が今も沖縄に集中しています。また、アメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設計画をめぐり沖縄県が実施した県民投票で、投票者の7割以上が埋め立てに反対の意思を示したあとも政府は埋め立て工事を続けていて、県と政府の対立は深まっています。

「慰霊の日」の23日は、平和への願いを新たにする一方、沖縄の基地問題を改めて問い直す日でもあります。

「平和の礎」多くの人が祈り 平和への願い新たに
沖縄戦最後の激戦地、糸満市摩文仁の平和祈念公園にある、沖縄戦などで犠牲になった人たちの名前が刻まれた「平和の礎」では、朝早くから多くの人が訪れ追悼しています。

2歳の妹と父、それに祖母を亡くした八重瀬町出身で宜野湾市の宮城勝子さん（79）は「この平和祈念公園のすぐ近くまで戦火を避けて逃げ、生き延びました。母は毎年来ていましたが、亡くなってしまったので代わりに来ています。もう沖縄戦から74年がたつんですね」と話していました。

沖縄戦でおじを亡くした読谷村の棚原治江さん（77）は「戦争当時は3歳で、姉におんぶされて戦火から逃げました。砲弾が落ちて大きな穴のあいた地面に横たわる遺体や、遺体に寄り添う幼子の姿など、つらい思い出がよみがえります」と話していました。そのうえで「今の沖縄は、変わらず爆音が鳴り響き、戦争当時と全く同じで、74年がたっても梅雨が明けられないような気持ちです。一生懸命運動をしても全く変わらず、正直、どうしたらよいのか分からない」と話していました。

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者を追悼する「慰霊の日」を迎えた。糸満市摩文仁の平和祈念公園にある戦没者名が刻まれた「平和の礎（いしじ）」には、強い雨にもかかわらず早朝から多くの遺族らが訪れ、戦没者の冥福を祈った。沖縄県などによると、慰霊の日に雨が降ったのは30年ぶりという。

「平和な世の中で、子や孫も元気に成長しています。安心して見守ってください。那覇市の渡嘉敷清次さん（76）は娘や孫らと一緒に、母と祖母の名前が刻まれた礎の前で手を合わせた。



「慰霊の日」を迎え、沖縄戦犠牲者の名前が刻まれた「平和の礎（いしじ）」の前で手を合わせる遺族（23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園）

避難していた壕（ごう）に爆弾が落ちて亡くなった母。長引く避難生活の中で栄養失調で亡くなった祖母。優しく2人を奪った沖縄戦のことを子や孫に語り継ぐことが「生き残ったものの使命」と考えている。春には孫と一緒に当時の避難先も見て回ったという。

清次さんと一緒に手を合わせた孫の高良英汰君（8）は「おじちゃんの話聞いて、戦争はとても悲しいものと分かった。自分は平和な令和の時代をつくっていきたい」と礎の前で誓った。

叔父3人を亡くした呉屋幹子さん（56）は、足を悪くして来られない母の代わりに礎を訪れた。「おにいたちは私を背中におぶって逃げ回ってくれたんだよ。戦争のことを語りたがらない母だが、兄たちの話だけは今でもよく話すという。「戦争を体験した世代が少なくなっていく新しい時代に、どう教訓を継いでいくか考えなければ」と話した。

防衛隊として招集された父と兄が戦死した那覇市の金城靖子さん（82）は次男の真義さん（58）とともに訪れた。父の遺骨は今もみつかっておらず、記憶もあまり残っていない。ただ6人きょうだいのうち今も生き残っているのは自分だけで「健康なうちは来続けたい」と考えている。「世界では紛争が絶えないが、戦争は二度とおこしてはならない」と力を込めた。

沖縄戦 74年「慰霊の日」平和への願い 戦争の記憶どう受け継ぐ

NHK2019年6月23日 7時04分

糸満市から家族で訪れた 15 歳の男子高校生は、「平成の時代には戦争はなかったが、令和の時代でも平和が続いてほしいという願いを込めて祈りをささげました。戦争や争いごとのない世界になってほしいです」と話していました。

また八重瀬町から訪れた 68 歳の女性は、学徒として動員され、亡くなりたいとこや親戚を慰霊するため、娘とともに花を手向け祈りをささげていました。女性は、「私自身は戦争を経験していませんが、小さいころから常に、母から戦争の悲惨さについて聞かされていました。戦争のことを思うと涙が出てしまいます。いまだに世界中で戦争が行われていますが戦争は絶対にいけないということを沖縄から全世界に伝えたいです」と話していました。

<ぬちかじり 沖縄を伝える> (上) 権力と対峙 貫いた反骨記者 政府も米軍も信用せず

東京新聞 2019 年 6 月 21 日 朝刊

琉球新報新聞博物館に展示された池宮城秀意の資料。愛用の万年筆などが並ぶ＝那覇市で



沖縄県名護市辺野古（へのこ）に米軍の新基地を建設する政府に対し、厳しい姿勢で臨む地元メディアには、インターネット上などで「偏向報道だ」との声が上がる。沖縄の実情を伝えてきた記者らの苦闘と努力はどれだけ知られているのだろう。「ぬちかじり（命の限り）、闘う」。がんで余命一年を宣告されながら沖縄を追い続けるジャーナリスト森口豁（かつ）（81）と現地を訪れ、考えた。二十三日は沖縄慰霊の日。（石原真樹）

「当時は焼け野原だったから、海はもっとよく見えたはず」

沖縄が梅雨入りした五月中旬、本島南部の豊見城市伊良波（とみぐすくしいらは）。沖縄戦の時に避難壕（ごう）があった丘の中腹で、森口はつぶやいた。「あの人が生を確かめた瞬間の光景を、自分の目で見たかった」と森口。戦後の報道は、ここが原点だと思ったからだ。

沖縄戦で使われた壕の跡を学芸員の案内で取材する森口豁（左）＝5月、沖縄県豊見城市で



あの人は、七十四年前、当時三十八歳の日本兵だった池宮城秀意（いけみやぐしくしゅうい）。池宮城は戦後、琉球新報の編集局長などを務め、現地の報道をリードしてきたジャーナリストだ。沖縄日報の記者だった戦前は、戦意高揚の紙面に反発して一九四〇年に辞職。四五年二月に徴兵され、沖縄戦の地獄を見た。

砲弾の雨をくぐり抜け、たどり着いた壕の中で、手足をもがれた傷病兵がうめき声を上げる様子を、池宮城は日記に書き残している。六月二十日、伊良波の壕を出て米軍に投降した。

池宮城は四六年、米軍の支援を受けて創刊したウルマ新報（琉球新報の前身）で編集長に就く。記者経験などを買われたためだが、戦後の米軍統治下でも戦中と同じく、報道の自由を守るのは容易でなかった。

「編集や人事に口を出さない」という約束は守られず、ソテツを食べた住民が死亡したとの記事に「米国が食べ物を与えていないことになる」と抗議を受けるなど、介入との闘いが続いた。そんな緊張感が漂う五八年、二十一歳だった森口は記者として採用され、東京から沖縄に移住した。

「地元紙がしっかりしないと、権力の意のままになり操られる。それは怖いことだ」。森口は池宮城から折に触れ、そう言われた。池宮城は、沖縄に悲惨な結果をもたらした日本政府も、米軍も信用していなかった。

琉球新報の社長となった池宮城は六五年、米国が任命していた琉球政府行政主席を公選制にするべきだとのアピールを沖縄タイムスの社長らと出す。地元の姿勢を毅然（きぜん）と示し、公選制は三年後に実現した。

戦前から四十三年間、反骨のジャーナリストとして地元の報道に携わった池宮城は、八九年に八十二歳で亡くなった。権力に厳しく対峙（たいじ）する琉球新報の姿勢は、いまでも変わらない。

森口は今年、九五年に出版した池宮城の評伝を再版した。「沖縄で言論を守るのは簡単ではなかった。その歴史を知ってほしい」（敬称略）

<もりぐち・かつ> 1937年東京生まれ。56年に初めて沖縄を訪問し、58年に都内の大学を中退し琉球新報社に入社。東京支社勤務を経て59年1月から沖縄で記者として働く。61年から日本テレビ沖縄通信員を兼務、63年に琉球新報社を退社し日テレの沖縄特派員に。74年に東京本社勤務になってからも沖縄取材を続け、90年からフリー。ドキュメンタリー「ひめゆり戦史・いま問う国家と教育」（79年）などで84年にテレビ大賞優秀個人賞。

<ぬちかじり 沖縄を伝える> (中) ウルトラマン脚本家の苦悩

本土との溝 深いまま

東京新聞 2019年6月22日 朝刊

金城哲夫資料館に展示されている森口と金城らが作った壁新聞＝沖縄県南風原町で



ジャーナリスト森口豁(かつ)(81)＝千葉県松戸市＝が初めて沖縄を訪れたのは六十三年前、東京の高校生のとこだ。米軍統治下の沖縄行きを誘ってきたのは、同じ高校で一年後輩の金城哲夫＝写真。後に日本中の子どもたちを熱狂させたウルトラマンの脚本家になる金城は沖縄からの「留学生」だった。



「沖縄の人たちが置かれている状況を見てほしい」という金城の願いに、森口ら生徒と教員の計十八人が応じた。一九五六年の春休み、約二週間かけて民家などに泊まり、トラックの荷台に乗って高校を訪ね、生徒らと交流した。

訪れた高校では、米軍に農地を接収され、米兵の犯罪が続いているとの訴えもあった。「なぜこんなちっぽけな沖縄に基地をつくらなきゃならないのか」と問う生徒に、森口は何も言えなかった。

立派な米軍基地と住民の粗末なバラックが混在する沖縄の風景。一方で、東京は高度経済成長の入り口にさしかかり、政府の経済白書は同年「もはや戦後ではない」と掲げた。その落差に森口はショックを受ける。金城らと沖縄での体験を紹介する壁新聞を作り、体験記の冊子を全国の高校計二百五十校に送るなど、沖縄を伝える活動を始めた。

森口は五八年、東京の大学を中退して琉球新報の記者に。金城は東京で、後にウルトラマンを製作する円谷プロに入社する。森口は沖縄で金城の母親が営む食堂で食事し、金城は世田谷区にある森口の実家によく遊びに行った。金城が会社を辞めて沖縄に戻ると、森口と子どもを連れて南部の新原(みいばる)ビーチで遊んだ。

金城はウルトラマンシリーズで、沖縄を意識した脚本を書いている。七一年の「帰ってきたウルトラマン／毒ガス怪獣出現」は、沖縄の米軍施設で毒ガス兵器の貯蔵が明らかになった後に執筆した。沖縄の方言を怪獣の名前に付けることもあった。

沖縄の本土復帰後、金城は七五年の沖縄国際海洋博覧会の演出を任される。沖縄の良さを世界にアピールできると張り切ったが、復帰後も米軍基地を残した政府への反発などから地元の協力は得られず、酒の量が増えた。

「哲夫は本土と沖縄のギャップに悩んでいた」と森口は当時を振り返る。金城は七六年、酒に酔って自宅二階から転落し、三十七歳で亡くなった。

先月中旬、森口は十年ぶりに新原ビーチに足を運んだ。五十キロ離れた名護市では、多くの県民が反対する中で政府が新基地の建設を進め、本土と沖縄の溝は今も深いままだ。「もし哲夫が生きていたら、何て言うだろうか」と森口。

十代の二人が作った壁新聞は、県内の金城哲夫資料館に残っている。見出しには「沖縄と本土のかけ橋に」とあった。(敬称略)

<ぬちかじり 沖縄を伝える>(下) 地元の目 何を映す 余命1年 無理解にあらがう

東京新聞 2019年6月23日 朝刊

米軍基地を囲むフェンス上の鉄条網について話す森口豁＝沖縄県浦添市で



五月中旬、ジャーナリストの森口豁(かつ)(81)＝千葉県松戸市＝と沖縄県浦添市の米海兵隊基地を訪ねると、民家やコンビニが基地のすぐそばまで迫っていた。ふいに森口が「フェンスの上にある鉄条網が、外を向いているのはおかしいと思わないか」と問いかけてきた。

鉄条網は不審者の侵入を防ぐものだから、外を向いているのが普通だ。首をかしげると、森口は「女性への暴行や交通事故など、基地の中から米兵が出てきて犯罪を起こしている。沖縄の人は、防ぐべきは米兵の方だって思っている」と語気を強めた。

森口は出身地の東京から沖縄に移住し、現地の目線にこだわって報道してきた。その立ち位置を意識したのは大学生だった一九五七(昭和三十二)年夏、二度目に沖縄を訪問した時の出来事がきっかけだという。

報道写真家を目指していた森口は、農村の暮らしを撮影しようと、三和村(現糸満市)を歩いていた。畑を耕している高齢女性に「こんにちは」と声をかけると、女性はクワを放り出し、家の中に逃げていった。

初めて沖縄を訪れた前年、沖縄戦では日本兵が壕(ごう)から住民を追い出したり、泣き声を上げる赤ん坊を殺すよう母親に命令したりしたと聞いていた。「怖い目に遭わされた日本兵と私が重なったのではないか」と衝撃を受けた。

「戦争や基地を持ち込んだ本土は加害者。自分はその一人なんだ」との罪悪感を胸に、沖縄の人の思い、声、息づかいを伝えようと心に決めた。

七二年五月、沖縄が本土復帰した時の報道も、地元目線にこだわった。当時は琉球新報を辞め、日本テレビの沖縄特派員。米軍の在沖陸軍司令部に初めて揚がる日の丸をどう取材するか、本土のクルーと打ち合わせた。

米軍からは、基地内で日の丸を撮影できるという取材案内がきていた。だが、森口は「それは違うんじゃないか」と主張。「基地に揚がる日の丸は、復帰しても基地がなくなることの象徴。複雑な気持ちで見つめる沖縄の人の目線で撮るべきだ」。フェンスの外から撮った映像を報じた。

東京本社勤務になった後も沖縄の取材を続けてきた森口。浦添市の米海兵隊基地を訪ねた先月中旬も、基地内の日の丸は星条旗の隣でゆらゆらと揺れていた。「当時は何を取材する場合でも俺たちはどこに立つべきか、とことん考えた」と森口は静かに話した。

がんで余命一年を宣告されたのは今年二月。三月に手術し、抗がん剤治療を続けている。副作用による体のだるさや頭痛などに苦しみながら、「沖縄の歴史、人々の気持ちを深く知ってほしい」と講演を続ける。

いつまで自由に動けるかわからない。それでも沖縄への無理解にあらがい続ける。ぬちかじり（命の限り）。（敬称略）

＝この連載は石原真樹が担当しました。

ひめゆりの塔で慰霊祭＝同窓生ら350人参列―沖縄 時事通信 2019年06月23日 17時54分



Gamma (洞窟) の前で手を合わせるひ

めゆり同窓会会長の玉城節子さん＝23日午後、沖縄県糸満市

沖縄県糸満市のひめゆりの塔で23日、沖縄戦の犠牲となった学徒隊を追悼する慰霊祭が行われた。併設する資料館がこの日で開館30周年を迎えたこともあり、式典には同窓生ら約350人が参列して犠牲者を悼んだ。

慰霊祭の式典で、ひめゆり同窓会の玉城節子会長は「戦火の中で亡くなった皆さまの心を無にすることなく、戦争のない時代を引き継いでいくことを誓う」とあいさつした。



ひめゆりの塔で行われた慰霊祭で、Gamma (洞

窟) の前で手を合わせる同窓生の女性＝23日午後、沖縄県糸満市

この日は午前から土砂降りの大雨だったが、式の前には小康状態に。元学徒で資料館長も務めた本村つるさん(94)は「開館時も大変な雨だったが、(きょうと)同じ時間にやんだ。30年前と通じていて、思いがいっぱいになる」と話した。

沖縄、女学生の悲劇語り継ぐ ひめゆり資料館30年 2019/6/23 19:16 (JST)6/23 19:17 (JST)updated 共同通信社



「ひめゆりの塔」で行われた沖

縄戦の戦没者慰霊祭＝23日午後、沖縄県糸満市

沖縄戦に看護要員として動員された「ひめゆり学徒隊」の被害を伝える沖縄県糸満市の「ひめゆり平和祈念資料館」は、慰霊の日の23日、開館30年となった。戦没者名を刻んだ「ひめゆりの塔」で慰霊祭があり、犠牲になった女学生たちを遺族ら約350人がしのぶとともに、今後も語り継いでいくと誓った。

ひめゆり学徒隊は、沖縄本島南部の陸軍病院などで負傷兵を看護。戦火の中で240人のうち136人が亡くなった。戦争の恐ろしさを後世に伝えるため、同窓生らが1989年に資料館を開いた。

式典では、元生徒らが戦時中の卒業式で歌おうと練習していた「別れの曲」を、声を震わせて歌った。



開館30年となった「ひめゆり

平和祈念資料館」＝23日午後、沖縄県糸満市

ひめゆり平和祈念資料館30年 高齢化する元学徒、若い職員が戦争体験語り継ぎ

毎日新聞 2019年6月22日 23時01分(最終更新 6月23日 03時24分)



修学旅行生たちにひめゆり学徒隊の歴史を伝える尾鍋さん＝沖縄県糸満市のひめゆり平和祈念資料館で2019年6月12日午後2時3分、佐野格撮影

ひめゆり平和祈念資料館が抱えるもう一つの課題が元学徒の高齢化だが、戦後世代の職員が元学徒の戦争体験を語り継ぎ、乗り越えようとしている。

「会話をしていた友達が一瞬で肉片となって散らばっている。これが戦場なんです」。5年前に86歳で亡くなった元学徒、宮城喜久子さんの証言映像が資料館のホールに流れる。6月12日、資料館職員の尾鍋拓美さん(38)が、修学旅行の高校生約100人に「講話」で宮城さんの過酷な体験を説明した。

尾鍋さんは真剣な表情で聴く高校生にこう続けた。「喜久子さんは『無知は恐ろしい』と言っていた。私は皆さんと同じで戦争体験はない。今後も同じ過ちを繰り返さないためには知る努力をやめないことが大切です」



ひめゆり平和祈念資料館内の壕

(ごう)のジオラマ前で来館者に当時の状況を説明する元学徒の仲里正子さん(中央)＝沖縄県糸満市で2019年5月25日午前11時49分、遠藤孝康撮影

長年にわたって修学旅行生らの前に立ち続けてきた元学徒も高齢化が進み、現在も資料館の活動に関わるのは90～94歳の6人だけ。そこで資料館は「体験者が一人もいなくなる時代」を見据え、2002年に「次世代プロジェクト」をスタート。元学徒の証言を映像化するだけでなく、若い職員が元学徒と日常をともに過ごしながらかけて時間をかけて戦争体験を継承してきた。

15年に修学旅行生ら団体への「講話」を元学徒から職員へバトンタッチ。現在は30～50代の5人が元学徒の体験を語っている。

非体験者が語る「ひめゆり」。戦争を知らない世代に真相を伝えるのは難しさを増しているが、非体験者だからこそ伝えられることもあるという。生存者の苦悩だ。尾鍋さんは言う。「元学徒の皆さんは自分だけが生き残り、戦場で亡くなった友人に後ろめたさを感じて生きてきた。苦しい思いを自分では語れなかった人も多く、思いを代弁したい」

ひめゆり学徒隊

沖縄戦に動員された沖縄師範学校女子部と県立第一高等女子学校の生徒・教師の通称。米軍の沖縄本島上陸直前の1945年3月下旬に生徒222人と教師18人の計240人が旧日本軍に動員さ

れ、戦場で負傷兵の看護などに当たった。生徒は123人、教師は13人が死亡。沖縄本島南部まで逃げ、6月18日の解散命令後の数日で100人以上が犠牲となったとされる。旧日本軍の組織的戦闘が終わったのは6月23日だった。

ひめゆり学徒の慰霊祭 祈念資料館は開設30年の節目

日経新聞 2019/6/23 16:13



「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭に

参列し、校歌を歌う同窓生(23日午後、沖縄県糸満市) 傷病兵の看護のため動員され多くが亡くなった「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭が23日、沖縄県糸満市の「ひめゆりの塔」の前で開かれた。塔に隣接するひめゆり平和祈念資料館が開設されてちょうど30年の節目の日でもあり、元学徒や遺族ら約350人は不戦の誓いを新たにしました。

「まさか令和まで生きられるなんて思ってもみなかった」。ひめゆり学徒隊として沖縄戦に身を投じた沖縄県南風原町の宮良カツエさん(91)は涙ぐんだ。三日三晩砲弾の雨をくぐり抜けて逃げた体験を、戦後も昨日のことに思い出し、「いつ死ぬか」との恐怖に長年苦しんだという。



「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭に参

列し、手を合わせる同窓生代表(23日午後、沖縄県糸満市) それでも「目の前で亡くなった多くの友人の分まで精いっぱい生きなければ」と、小学校などで講演してきた。「同じような経験を絶対にさせてはいけなく、その反戦の思いは受け継いでいってもらいたい」と力を込めた。

3年前に亡くなった祖母が学徒隊だったと知り、初めて参列した那覇市の加治田佳枝さん(42)は「多くの若い子たちが何の罪もないのに戦争に巻き込まれるなんて、あってはならないこと。むごいことを語りたくなかった祖母の気持ちも分かる」と声をつまらせ「平和な時代が続くように私たちが努力しなければいけないと改めて思った」と話した。



「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭で

手を合わせる参列者(23日午後、沖縄県糸満市)

この日はひめゆり平和祈念資料館が開設されてちょうど30年の節目。元学徒で、前館長の島袋淑子さん(91)は「この日になるといつも亡くなった友達や先生の顔が目には浮かぶ。これからも資料館が平和の砦(とりで)であり続けるよう祈っています」と話した。

昨年4月に島袋さんの後任として初の戦後生まれの館長となった普天間朝佳さん(59)は「周囲に体験者がおらず、さらに戦争が遠くなってしまった世代が増えている。若い世代にも平和の尊さをしっかり伝えられるよう、工夫を重ねていきたい」と話した。

「今度は一緒に暮らそうね」平和の礎を訪れる人たちの思い
毎日新聞 2019年6月23日 11時22分(最終更新 6月23日 13時39分)



父と姉を亡くした赤嶺清光さん。「避難するとき、すぐ後ろにいた2歳上の姉の頭に艦砲射撃の破片が当たって即死でした。ほんの何秒かの差だった」＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午前8時43分、森園道子撮影

「沖縄慰霊の日」の23日、沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈念公園にあり、沖縄戦などの戦没者の名を刻んだ「平和の礎(いしじ)」には早朝から遺族らが訪れ、時折強い雨が降りつける中、手を合わせて祈る姿が見られた。

那覇市の元教員、諸見(もろみ)武彦さん(77)は、移住先のサイパンで日本軍に現地召集されて命を落とした父(当時25歳)の冥福を祈った。戦後苦労して育ててくれた母富美さんが昨年、97歳で亡くなった。「墓の中で一緒にいるだろうから、『けんかしないでよ』と伝えた。戦争は残された人にもつらい思いをさせる」と語った。



早朝から平和の礎に手を合わせる人たち＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月23日午前7時29分、森園道子撮影

祖父ら4人を亡くした那覇市の主婦、富永香誉乃(かよの)さん(39)は昨年、長男律(りつ)さん(4)に初めて戦争のことを語った。何を祈るかは任せていたが、律さんは礎に刻まれた祖父らの名前を前に「今度は一緒に暮らそうね」と祈ったという。富永さんは「伝え方が難しく戸惑ったが、ここに来て良かった」と話した。

叔父ら5人の名前前で手を合わせた宜野湾市の宮城直久さん(69)、隆子さん(65)夫婦は「二度と戦争を起こしてほしくない。辺野古では米軍普天間飛行場の移設工事が進んでいるし、米軍機が県内を飛び交うのも良い気持ちはしない」と話した。



魂魄の塔で家族と一緒に曾祖父への祈りをささげる少女＝沖縄県糸満市米須で2019年6月23日午前8時4分、佐野格撮影

糸満市米須(こめす)の慰霊碑「魂魄(こんぱく)の塔」にも、早朝から遺族らが訪れた。塔は終戦直後の1946年、周辺で野ざらしになっていた沖縄戦の犠牲者の遺骨を納めるために作られた。どこで亡くなったか分からず、遺骨も見つからない犠牲者の遺族が多く訪れる。

車椅子に乗った宜野湾市の知念康子さん(81)は娘や孫らと、防衛隊員だった父の冥福を祈った。

戦後、母も病死し、親戚に預けられるなどした知念さんは「戦争が終わり、『平和になりました』ではなかった」と振り返り、「貧しくて大変だったが、今は孫が11人。本当に幸せ。この平和がいつまでも続いてほしい」と語った。

孫の中学2年、久場碧葉(あおは)さん(13)は「もし祖母が来られなくても毎年来ようと思う。祖母が伝えてくれたことを私も伝えていこうと思う。平和が続くようにできる限りのことをしていきたい」と力を込めた。【遠藤孝康、佐野格、平川昌範、高橋慶浩】

沖縄戦集団自決を伝え残す チビチリガマ博物館1年

日経新聞 2019/6/21 9:48

74年前の地上戦で住民が集団自決した、沖縄県読谷村の自然壕(ごう)「チビチリガマ」の惨状を伝える博物館が、沖縄慰霊の日の23日に開館1年を迎える。戦争体験者が年々減る中、83人が自決に追い込まれた記憶の継承を図る。関係者は、過去の悲惨な事実を知ることによって戦争という過ちを忘れないでほしい、と願う。



沖縄県読谷村のユンタンザミュージアムの自然壕「チビチリガマ」を再現したジオラマと村教委文化振興課の土地克哉課長(14日)＝共同

博物館は、読谷村教育委員会が運営する「ユンタンザミュージアム」。チビチリガマを紹介する一画では、薄暗い壕の中で娘に殺すよう懇願された母親が、包丁を突き付ける様子などを再現したジオラマを展示している。赤ん坊の泣き声や、外へ出るよう呼び掛ける米兵の声も流れる。

来館者は今月中旬までに3万3千人を突破した。平和学習のた

めに訪れる人が多い。

太平洋戦争末期の1945年4月1日、同村がある沖縄本島中部へ米軍が上陸した。チビチリガマに約140人が避難し、翌2日、布団に火を付けるなどして83人が自決した。その6割ほどは18歳以下だったとされる。

村教委文化振興課の上地克哉課長(51)は小学生のころ、父親と一緒にチビチリガマへ入ったことがある。細かい骨や歯を、ばりばりと踏んだ感触が今も残る。遺族会の意向で、現在はガマの中に立ち入ることができない。その分、博物館の果たすべき責務は大きいと受け止めている。「来館者にはぜひ、過去の事実を見つめてほしい」

近所に住む知花昌一さん(71)は80年代前半に、チビチリガマの調査を手伝った。生き延びた人々から証言を聞き取ろうと訪ね歩いたが、当初はみんな口が重かった。「地域でガマの話はタブー視されていた」と回想する。

知花さんは集団自決の経緯を振り返り、教育の恐ろしさと大切さを感じ、「戦前戦中の『生きて虜囚の辱めを受けず』という教えによって、自分の子どもたちを手にかけた」と考えるからだ。

時代が移り変わるとともに、戦禍の記憶が薄れるのは避けられないと思う。「語り部も減っていく。風化をとどめる動きが必要だ」。博物館の今後の取り組みに、期待を寄せている。〔共同〕

玉城沖縄知事、河野外相と会談＝辺野古移設断念求める

時事通信 2019年06月22日 19時33分



河野太郎外相(左)に要望書を手渡す沖

縄県の玉城デニー知事＝22日午後、県庁

沖縄県の玉城デニー知事は22日、沖縄全戦没者追悼式に出席するため沖縄を訪れている河野太郎外相と県庁で会談した。玉城氏は米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古移設断念や日米地位協定の抜本的な見直しなどを要望。河野氏は移設への言及を避けつつ、「政府として、やれることはやっていきたい」と述べた。

沖縄知事、辺野古移設の中止要求 河野外相と県庁で会談

2019/6/22 19:25 (JST)共同通信社



河野外相(左)と会談し、要望書を

手渡す沖縄県の玉城デニー知事＝22日午後、沖縄県庁

沖縄県の玉城デニー知事は22日、河野太郎外相と県庁で会談

し、米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古への移設工事を即時中止するよう求めた。移設問題の解決に向け、政府と県の対話の場を設けることも要請した。河野氏はこれらに直接回答せず、沖縄の基地負担軽減に取り組む考えを示した。

玉城氏は、辺野古埋め立てに反対が7割超となった2月の県民投票に触れ「圧倒的多数で明確に示された民意は極めて重い。政府にしっかりと受け止めてもらいたい」と訴えた。河野氏は「基地負担軽減について、政府としてできることは一つ一つやっていきたい」と述べるにとどめた。

しんぶん赤旗 2019年6月23日(日)

辺野古新基地 建設中止改めて要求 デニー県知事 河野外相と面談



(写真)河野外相(左)に要望書を

手渡すデニー知事＝22日、沖縄県庁

沖縄県の玉城デニー知事は22日、県庁で河野太郎外相と面談し、安倍政権が強行する同県名護市辺野古米軍新基地建設の工事中止を改めて求めました。有害物質による水汚染の原因特定のための米軍基地立ち入り調査の実現と、日米地位協定の改定に向けて米側に働きかけるなどの取り組みの促進を改めて要請しました。

デニー知事はマスコミに公開された面談の冒頭で、米兵・軍属による女性殺害事件、米軍基地からの騒音被害、米軍機の部品落下事故などにより、沖縄は「基地あるがゆえの命が脅かされる状況」だと強調。県内の有機フッ素化合物による水汚染についても「県民は大変不安に思っている」と語りました。

辺野古新基地建設についてデニー知事は、「圧倒的多数で明確に示された(県民の)民意は極めて重い」と述べ「政府もその民意をしっかりと受け止め、埋め立て工事を中断し、問題解決のために県との真摯(しんし)な対話の場をつくっていただきたい」と訴えました。

河野外相は冒頭で、「政府としてしっかりとやれるところは一つひとつやっていきたい。特に安全面に関しては米軍にきちんと申し入れをする」と述べましたが、面談後のデニー知事の説明によると、辺野古新基地や日米地位協定改定については、外相は言及しなかったといいます。

幾多の尊い犠牲、忘れない＝慰霊の日前夜祭一沖縄

時事通信 2019年06月22日 20時15分



沖縄「慰霊の日」の前夜祭で火をともし戦没者の

遺族代表＝22日夜、沖縄県糸満市の平和祈念公園

太平洋戦争末期の沖縄戦の組織的戦闘が終結したとされる「慰霊の日」を前に、最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁で22日夜、遺族ら約400人が参加した前夜祭が開かれた。

主催した公益財団法人沖縄協会の野村一成会長（79）は「令和の時代を生きる私たちは、現在の生活が幾多の尊い犠牲の上に築かれたことを決して忘れず、全世界に恒久平和の実現を訴え続けていく」とあいさつした。



沖縄「慰霊の日」の前夜、「平和の火」

に手を合わせる親子＝22日夜、沖縄県糸満市の平和祈念公園

午後7時すぎ、会場の沖縄平和祈念堂前で、遺族代表がかかり火に点火。その後、「平和の鐘」が鳴らされると、堂内の参列者は鐘に合わせて黙とうした。

沖縄、23日に「慰霊の日」 平和祈念公園で追悼の前夜祭

2019/6/22 19:47 (JST)共同通信社



「慰霊の日」を前に、多くの人たちが沖縄県糸満市の平和祈念公園を訪れ、「平和の礎」に名前が刻まれた沖縄戦犠牲者を悼んでいた＝22日午後

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦で組織的な戦いが終わったとされる「慰霊の日」を迎える。74年前に最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では22日、戦没者追悼式の前夜祭が開かれた。地上戦で犠牲となった20万人以上に遺族らが鎮魂の祈りをささげ、不戦を誓った。

国籍や軍民を問わず戦没者の氏名を刻む石碑「平和の礎」には今年42人が追加刻銘され、計24万1566人となった。

23日の「沖縄全戦没者追悼式」は同公園で午前11時50分から開かれ、安倍晋三首相や玉城デニー知事らが出席する。



沖縄全戦没者追悼式の前夜祭で、平和を願う灯をともし遺族代表＝22日夕、沖縄県糸満市の平和祈念公園

政府、米軍施設跡地利用で懇談会 「沖縄をエンタメの島に」

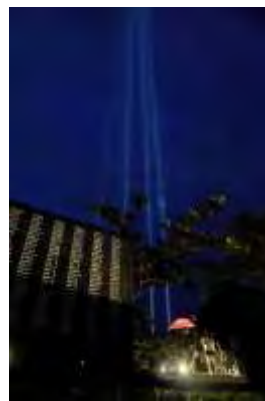
2019/6/20 19:43 (JST)共同通信社

政府は20日、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）など沖縄の米軍施設の移設・返還に絡み、返還後の跡地の利用方法を検討する懇談会の初会合を東京都内で開いた。委員からは「沖縄を世界一のエンターテインメントとスポーツの島にしては」といった提案や、産業の集積拠点にすべきだとの意見が出た。一方、街づくりの手法について「地元で丁寧な説明が必要だ」との注文も付いた。

委員は、沖縄の映画祭に携わる吉本興業の大崎洋会長や建築家、科学技術の専門家ら5人。普天間飛行場のほか、米軍牧港補給地区（浦添市）と米軍那覇港湾施設（那覇市）を対象に議論した。

沖縄「慰霊の日」前夜祭 遺族ら約400人が黙とう

毎日新聞 2019年6月22日 21時13分(最終更新 6月22日 21時53分)



戦没者を悼んで点灯された「平和の光

の柱」＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2019年6月22日午後8時、津村豊和撮影

太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者らを悼む「慰霊の日」（23日）に開かれる沖縄全戦没者追悼式の前夜祭が22日夜、最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園であった。「平和の鐘」が鳴り響く中、参列した遺族ら約400人が恒久平和を祈って黙とうした。

公益財団法人沖縄協会主催の式典は園内の沖縄平和祈念堂であり、野村一成（いっせい）会長が「令和の時代を生きる私たちの生活は、幾多の尊い犠牲の上に築かれたことを決して忘れない」とあいさつ。祖父を沖縄戦で亡くした那覇市の会社員、宇根徹哉さん（50）ら遺族が「鎮魂の火」をともした。

園内ではその後、戦没者の「トートメー」（位牌（いはい））に見立てた5本のサーチライトが空に向かって照らされた。【平川昌範】

鎮魂の明かり、令和も平和祈る 沖縄慰霊の日前夜祭

日経新聞 2019/6/22 21:01

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者を悼む「慰霊の日」を迎える。最後の激戦地だった沖縄県糸満市摩文仁の平和祈念公園では22日夜、追悼式の前夜祭が開かれた。遺族の手によってともされた鎮魂の明かりを見つめ、参列者は戦没者の冥福と

新しい時代の平和を静かに祈った。



沖縄全戦没者追悼式の前夜祭で「鎮魂の火」をともし遺族代表（22日、沖縄県糸満市の平和祈念公園）時折小雨が降るなか、園内の沖縄平和祈念堂前では犠牲者の遺族、宇根徹哉さんと宮良美幸さんが「鎮魂の火」をともし、集まった約400人は堂内で約2分間黙とうをささげた。23日には沖縄全戦没者追悼式が行われる。

公益財団法人沖縄協会の野村一成会長は「令和の時代を生きる私たちは現在の生活が幾多の尊い犠牲のうえに築かれたことを決して忘れず、恒久平和の実現を訴え続けていく」と強調した。沖縄戦で父を亡くした那覇市の無職、宮里善行さん（78）は「新しい時代にもこんな悲惨な戦争は二度と起こらないように祈り、語り継ぎたい」と話した。

公園内にある沖縄戦犠牲者を中心とした戦没者の氏名が刻まれている「平和の礎（いしじ）」には今年新たに42人が追加され、総数は24万1566人となった。沖縄全戦没者追悼式には玉城デニー県知事や安倍晋三首相らが出席する。

沖縄戦は1945年春、米軍が沖縄本島や周辺諸島に上陸して始まり、住民を巻き込んだ激しい地上戦が展開された。日米双方で20万人以上が犠牲となり、同年6月23日に組織的戦闘が終わったとされる。

辺野古移設の即時中止要求 沖縄知事、外相と会談

日経新聞 2019/6/22 18:30

沖縄県の玉城デニー知事は22日、河野太郎外相と県庁で会談し、米軍普天間基地（宜野湾市）の名護市辺野古への移設工事を即時中止するよう求めた。移設問題を巡り、政府と県の対話の場を設けることも要請した。河野氏は基地負担軽減に取り組む考えを示した。

玉城氏は2月の県民投票で反対の民意が示されたとして「直ちに埋め立て工事を中断し、問題解決のために沖縄県との対話の場をつくるよう尽力してほしい」と述べた。河野氏は「基地負担軽減について、政府としてできることは一つ一つやっていきたい」と応じた。

玉城氏は米軍機事故などの際に日本の捜査権が制限されている日米地位協定の改定も求めた。

玉城氏は今月4日に米軍ヘリコプターの部品が浦添市の中学校に落下した問題も取り上げ、安全管理体制の見直しを米軍に働き掛けるよう要請したとみられる。

〔共同〕

沖縄戦証言映像、都内で上映会 「戦争は全てを破滅に」と訴え
2019/6/22 20:47 (JST)共同通信社



東京都内で開かれた「沖縄の戦争展」。沖縄戦生存者のインタビュー映像が上映された＝22日午後
沖縄戦で組織的戦闘が終わったとされる23日の「慰霊の日」を前に、生存者のインタビュー映像を上映する「沖縄の戦争展」が22日、東京都内の書店で開かれた。家族が犠牲になり、「戦争は全ての人間を破滅に追い込む。絶対やっちゃいかん」と訴える映像に、約100人の来場者が真剣な表情で見入った。

映像で生存者の男性（85）は「艦砲（射撃）で、弾が母親の胸に当たって突き抜けた」「（当時3カ月の妹が）おっぱいがなくて泣くでしょ。『敵に見つかるから殺す』と（集落の大人が）言う」と話した。

会場には、犠牲者の遺骨収集の際に一緒に出てきた、砲弾の破片やペンも展示された。

沖縄戦遺骨の鑑定申請を呼び掛け 市民団体が遺族に
2019/6/22 19:18 (JST)6/22 19:19 (JST)updated 共同通信社



沖縄戦の遺族らにDNA型鑑定の申請について説明する、市民団体「ガマフヤー」の具志堅隆松代表＝22日午後、那覇市

沖縄戦犠牲者の遺骨を収集する市民団体「ガマフヤー」（那覇市）は22日、遺骨の身元特定を進めるため、国にDNA型鑑定の申し込みよう遺族に働き掛ける説明会を開いた。遺族の意向を取りまとめ、8月ごろに厚生労働省に申請する。

「遺骨はほとんど身元不明。遺族に届けるにはDNA型鑑定しかない」。具志堅隆松代表（65）の話に、那覇市の会場に集まった約40人の遺族らは真剣な表情で聞き入り、その場で十数人が申請書を提出した。

沖縄県八重瀬町の喜屋武幸弘さん（67）は戦争に動員された伯父の遺骨代わりに石が届いたと聞いた。「せめて墓では伯父の両親と一緒にしたい」と話した。

沖縄米軍機事故60年の舞台上演 高校生、「慰霊の日」前に
2019/6/22 00:34 (JST)共同通信社



米軍戦闘機墜落事故の

惨状を伝える舞台を終え、あいさつする北谷高校の生徒たち＝
21日午後、沖縄市民会館

沖縄県石川市（現うるま市）で米軍戦闘機が小学校に墜落し、児童や住民ら200人超が死傷した事故から30日で60年となるのを前に、県立北谷高校の生徒は21日、当時の惨状を伝える舞台を上演した。「米軍機が飛び続け、またいつ起きるか分からない」。事故を目の当たりにした人々が減る中で、若者が記憶の継承に奮起している。

74年前の沖縄戦犠牲者をしのぶ23日の「慰霊の日」が近づく中、平和学習の一環で行われた舞台。全校生徒と保護者ら約800人が沖縄市民会館に集まった。

「60年たっても許せない」。子どもを亡くした人々の役を務める生徒らが、無念さをにじませた。

沖縄戦遺品展 激戦す日用品 「本土も向き合って」 都内で関東初

毎日新聞2019年6月23日 18時29分(最終更新 6月23日 21時34分)



展示されている沖縄戦の遺品＝東

京都江東区の東京大空襲・戦災資料センターで2019年6月23日午後0時5分、竹内麻子撮影

「慰霊の日」の23日、地上戦の犠牲となった人たちの遺品などを展示する「遺品が語る沖縄戦」が、東京大空襲・戦災資料センター（東京都江東区）で始まった。これまで西日本を中心に巡回展が開かれてきたが、関東では初。7月21日まで。



西尾慧吾さん＝本人提供

主催するのは「沖縄戦遺骨収容国吉勇応援会」。学生共同代表の西尾慧吾（けいご）さん（20）＝大阪府茨木市＝は2015年夏に高校の修学旅行で初めて沖縄を訪れ、沖縄戦の歴史に関心を抱いた。半年後に再訪した際、沖縄戦で家族を亡くし、戦後ガマ（天然壕（ごう））や壕で遺品を収集してきた国吉勇さん（80）＝那覇市＝に遺品を見せてもらい、「沖縄戦の歴史を全然知らなかった」と衝撃を受けた。大学に進学後、国吉さんに聞き取りを重ね、遺品の展示会を開いてきた。

ぼろぼろの茶わん、タンスの破片、溶けたガラス瓶――。今回、展示されているのは、国吉さんが約60年かけて集めた十数万点

のうち約60点。西尾さんは「沖縄の人を犠牲にしてもよいという考えは、今の基地問題にもつながると感じる。本土の人としてどう沖縄に向き合うか考えるきっかけになれば」と話す。【竹内麻子】

「基地のある沖縄は平和な状態にない」列島縦断の石川文洋さん、長野・諏訪に帰宅

毎日新聞2019年6月20日 20時22分(最終更新 6月20日 20時22分)



「良い旅だった」と列島縦断一人あるき旅

を話す石川文洋さん＝長野県諏訪市の自宅で2019年6月20日午後3時13分、宮坂一則撮影

心臓疾患を抱えながら日本列島の徒歩縦断を達成した報道写真家の石川文洋さん（81）が、自宅のある長野県諏訪市に帰ってきた。本土最北端の北海道・宗谷岬を2018年7月9日に出発、東日本大震災被災地など太平洋岸を歩き、九州縦断から沖縄入りして今月8日、古里の那覇市にゴールした11カ月の一人「あるき旅」。基地のない平和な沖縄を訴えて歩いた距離は約3500キロ。靴を3足交換した。毎日新聞のインタビューに、「歩いて平和な日本を感じる。しかし基地問題のある沖縄は平和な状態にない」と日焼けした顔に苦渋の表情を浮かべた。

石川さんは、戦場カメラマンとしてベトナム戦争をはじめアフガニスタンなど世界の紛争地帯でカメラを通して戦争の悲惨さを発信してきた。諏訪湖を一望する諏訪市の高台に1993年から住む。



日本列島縦断の旅を終え、笑顔

であいさつする石川文洋さん＝那覇市で2019年6月8日午後2時5分、佐野格撮影

「歩くことが好きだから」と02年の3泊4日の木曾路あるき旅を皮切りに、翌03年に65歳で日本海側を列島縦断し3300キロ完歩。06年2月、徳島県から歩き始めた四国八十八カ所霊場の歩き遍路の途中、愛媛県を旅していた時に心筋梗塞（こうそく）を発症。手術、退院、リハビリを経て、再び歩き遍路に挑戦して満願した。

03年以來2回目の列島縦断となった今回は「自分への挑戦。80歳の高齢で心臓に障害を持つ自分が完歩できれば、同じ境遇の人に勇気や力を与えられる」と決断。ウォーキング用ポールを両手に、約10キロのリュックを背負い、カメラ3、4台を首から提げて、連日10時間前後を歩いた。東日本大震災や福島第1原発事故、阪神大震災、熊本地震の被災地なども訪問し、撮影や現地の人々の取材を重ねた。5月22日に沖縄入りし、各地を巡った。



海で抗議活動を繰り広げるカヌー隊にカメラを向ける石川文洋さん＝沖縄県名護市辺野古で2018年12月14日午後2時3分、比嘉洋撮影

心臓の異変に備えニトログリセリンを携行したが、健康のまま無事、大仕事を成し遂げた。「緊張が解けたせいかわれがどっと出てね」と笑う。列島縦断を振り返って「充実していた。1日に100枚以上写真を撮った。歩く旅でないとできない」とカメラマンとしての喜びを語った。「沿道で応援してくれる人たちに勇気もらった」と累積では3万5000枚を撮影。「(列島縦断は)私にもできた。歩くことは誰にでもできますよ」とメッセージを発信する。

沖縄では「基地のない沖縄を」などとプリントしたTシャツを着て歩いた。「気候が良く海がきれいで良い島だが、日本の米軍基地が集中しているのは異常。平和な島に基地は似合わない」「ベトナム戦争では沖縄から飛び立った米軍爆撃機が爆弾を落とし、傷付いた人々や建物を撮影した。沖縄が再び加害者になってはいけない」と語気を強め「沖縄の現状をできるだけ大勢の人に伝えることが私の役割かな」と平和希求の思いを語った。

23日は「沖縄慰霊の日」。石川さんは、同日午前10時から長野県茅野市の「ゆいわーく茅野」で市民団体「すわ＝沖縄ゆいネット」が主催する交流会で沖縄への思いや列島縦断を語る。その後も、県内外で講演や写真展などが予定されているという。【宮坂一則】

沖縄慰霊の日 中城出身の地上戦体験者が米国でウチナーグチ講座

毎日新聞2019年6月20日 11時13分(最終更新 6月22日 15時06分)



かりゆしウエア姿でウチナーグチを英語で教える比嘉朝儀さん＝米西部カリフォルニア州ロサンゼ

ルス近郊ガーデナで2019年6月14日、福永方人撮影

米国本土には沖縄にルーツを持つ日系人が6万人以上いるとされる。その中に、ウチナーグチ(沖縄の言葉)など古里の文化や歴史を伝え続ける男性がいる。西部カリフォルニア州ロサンゼルス近郊に住む比嘉朝儀(ちょうぎ)さん(78)。中城村(なかぐすくそん)出身で、20万人以上が死亡した沖縄戦の体験者だ。毎年6月23日の「慰霊の日」が近づくと、平和の尊さをかみしめる一方、沖縄の米軍基地問題を複雑な心境で見つめている。【ロサンゼルス福永方人】

「What is ちゅらカーギー?」「ちゅら means beautiful. ちゅらカーギー is a beautiful person」

今月14日、ロサンゼルス郊外にある北米沖縄県人会の事務所で、比嘉さんがウチナーグチを英語で解説していた。毎月1回の講座で学ぶのは沖縄からの移民や子孫らが10人ほど。母親が沖縄出身というスー・ドルビーさん(56)は「母の言葉の響きが好きで習い始めた。難しいけど楽しい」と笑顔で話した。

講座を始めたのは2002年。「文化と一体の言葉を知らなければ、伝統は継承できない」との思いからだ。講座では沖縄から取り寄せた資料を使い、琉球王国時代や沖縄戦などの歴史も教える。「戦争体験者が減っていますが、風化させてはいけない。命の大切さを若い人たちに伝えていかないと」。日本語学校で沖縄戦の授業もした。

比嘉さんは沖縄戦当時、4歳。中城村も戦場と化し、祖母と兄2人と北部へ逃げた。降り注ぐ米軍の艦砲射撃の中、多くの遺体を目にした。食べ物もなく約3カ月間、ソテツやバッタなどを口にしてしのいだ。「子供ながらに戦争のむごさを強烈に感じましたよ」

一方で、だからこそ捕虜収容所で米軍にクッキーやチョコレートもらった時には「なんて豊かな国なんだ」と感動し、渡米を夢見た。県立普天間高校卒業後の1960年、米国在住の叔父を頼って移民船で海を渡った。米国人宅で住み込みで家事をしながらロサンゼルス近郊の大学を卒業し、スーパーマーケットチェーンで定年まで勤務した。

そんな比嘉さんも、米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の辺野古移設問題に話が及ぶと表情が曇る。故郷の米軍基地縮小を願うが、約60年暮らす米国にも恩と信頼を感じる。「同じウチナーグチ(沖縄の人)に第二の故郷の米国が批判されるのはつらいですよ」。県外移設が実現すれば理想的なのに、との思いは消えない。

沖縄慰霊の日

太平洋戦争末期、米軍上陸によって沖縄は激戦地になり、軍人と民間人計20万人以上が死亡。1945年6月23日、日本軍司令官が自決したことで組織的戦闘は終結した。沖縄県は74年、「戦争による惨禍が再び起こることのないよう」との願いから、条約で6月23日を「慰霊の日」と定め、全戦没者追悼式を開催している。

沖縄戦 7歳一人ぼっち 戦災孤児の戦後70年
沖縄タイムス2015年5月18日 04:01

今から70年前に、沖縄戦がありました。沖縄戦で家族を亡くして、孤児になった人は数千人もいると言われています。激しい地上戦によって、人も家も物も焼けて失われました。孤児たちは戦争中だけでなく、戦争が終わってからもたくさんの苦勞をしてきました。その一人、石原絹子さん(77)＝那覇市＝に体験を聞きました。



沖縄戦で家族を次々に失った時のつらい記憶

を振り返り、声を詰まらせる石原絹子さん＝4月26日、糸満市(長崎健一撮影)

■戦場さまよう

「子どもたちを殺すか、さもなくば、ここから出て行け!」。沖縄戦の時に国民学校(今の小学校)1年生だった私は、母と兄、2人の妹と一緒に隠れていた防空壕に、数人の日本兵が来て母に銃を突きつけ、脅し、食料を奪った光景を覚えています。小学3年の兄は、やけどを負って足が不自由な母に「妹たちを殺させないで」と言って肩を貸し、7歳だった私は1歳の妹をおぶって3歳の妹の手を引き、壕を出ました。

海を埋め尽くしたアメリカの軍艦からの砲撃と戦闘機の爆撃が続き、火炎放射器も火を噴いて、空も地面も真っ赤に染まりました。逃げる住民は次々と倒れ、粉々にちぎれた人の肉片が顔に飛んできました。あてもなく歩く途中で、日本兵に「摩文仁方面は安全だから」と教わり、必死にたどり着きましたが、そこは地獄のようでした。

「お母さん、私たち死ぬしかないの?」と聞くと、母は土や砂で真っ黒に汚れた顔で、何も言わずに頭をなでてくれました。昼も夜も爆弾が降り注ぎ、辺りは煙で見えなくなりました。気づくと、母と兄の姿がありません。たくさんの死体を踏み越えて探すと、2人は崩れた岩の下敷きになって亡くなっていました。



<沖縄戦>瓦礫と化した街

叫び声を上げて後ずさりし、我に返ると、今度はおぶっていた1歳の妹が冷たくなっていました。「起きてちょうだい!」と何度も揺さぶりましたが、動きません。妹のほおは紫色に変わり、目や鼻、口からウジがわき出して、払いのけても増えるばかりでした。

やがて3歳の妹の胸に、砲弾の大きな破片が突き刺さりました。

苦しそうな息で「お姉ちゃん、お水をちょうだい」と何度もせがまれましたが、戦場のまっただ中には、唇を潤す一滴の水さえありません。涙を浮かべながら、私の腕の中で息絶えました。

父も防衛隊として戦場へかり出され、亡くなりました。一人ぼっちになった私は、身も心も尽き果てて死体にうずもれ、遠のく意識の中で「今度は私が死ぬ番。これでみんなに会える」と思いました。どれほどの時間がたったのでしょうか。目をさました時には、学校で「鬼畜」と教わったアメリカ兵に抱かれていました。助かったのです。

■私を迎えに来て

命は助かりましたが、戦場で経験した怖ろしい光景や、煙の臭いが、毎日のように夢に現れてうなされました。「助けて!」と悲鳴を上げて飛び起きたこともよくありました。戦争が終わってから、長い間笑うことができませんでした。家族の死を受け入れることができず、本当はみんなどこかで生きているのではないかと思うようになりました。降伏した住民が集められた収容所で、来る日も来る日も小高い丘に登って、両親やきょうだいの名前を呼んでは「どこにいるの?私を迎えに来て」と叫び続けました。

収容所には、学校の校舎も木陰もなく、日照りの下に座らされて授業を受けました。ノートはなく、先生は子どもたちをごみ捨て場に連れて行って、アメリカ軍が活字を打ち損ねた紙をみんなで拾って裏側を使いました。鉛筆は1本を三つに分けました。食料もありません。草も燃えてなくなり、ネズミやバツタをつかまえて食べました。



<沖縄戦>集められた住民

収容所には、別に生き延びた祖母が、私が生きてると人づてに聞いて、迎えに来てくれました。私は会うとすぐに「お父さんもお母さんも、兄さんも妹たちも、なぜ死なないといけなかったの?」と泣きじゃくりました。祖母は私を抱きしめ、「みんな戦争が悪いんだ。どんなにつらくても、命を落とした家族のために強く生き抜こう」と説いてくれました。

収容所から祖母の家に移ってからも、さびしくてよく泣いていました。ある夕方、母が生前に使っていたツバキ油の香りが、ほのかに漂ってきたのです。祖母も気づきました。戦争が終わったばかりで、ツバキ油なんてない時代だけに、不思議でした。こんなこともありました。おばが昼寝をしている時に、夢の中で亡き母が枕元に立っていました。驚いて目を覚まし、外に出ると、私が雨に打たれてふるえながら泣いていたので、家の中に連れ戻してくれたそうです。

■遺骨さがし

家族の遺骨は、真夏に祖母とスコップ、わら袋を持って、今は「魂魄之塔(こんぱくのとう)」が建つ糸満市米須で朝から探し

ました。なかなか見つからず焦りました。日が暮れると、女性はアメリカ兵に乱暴され、殺される危険があるからです。アメリカ軍にとって沖縄の人は「戦利品」です。恐怖心でいっぱいでした。祖母はとうとう泣き出し、「魂があるならどこにいるか教えて」とスコップを土に突き差しました。

私とその下を掘ってみると、戦場で母が着ていた服が出てきました。紺地に白い花模様の地味な衣と、もんぺです。金歯もありました。兄が持っていた、肩がけのかばんも出てきました。読書好きの兄らしく、中には本が1冊入っていました。こうした遺留品と一緒に、母と兄の骨が見つかりました。妹2人の骨は、摩文仁で見つけました。一帯は戦争で亡くなった人々の骨がいっぱいで、雪が降ったような風景でした。

家族の遺骨を持ち帰って並べました。母は元気だったころ、「戦争が終わったらおうちの回りにいっぱい花を植えて、明るい家庭を作ろうね」と励ましてくれました。兄は「一生懸命勉強して、大きくなったらお医者さんになって、困っている人を助けてあげたい」と言っていました。3歳だった妹は「大きくなったらお菓子屋さんになる」と笑顔で話していました。

夢と希望を断たれ、変わり果てた家族の姿を前にして、「骨があっても（死を）受け入れられない」「受け入れることは私に死ねることよ」と泣き叫びました。母の頭がい骨を抱くと、いっそう涙があふれてきました。落ちる涙を、母の骨が優しく吸い取ってくれたように感じました。亡くなくても、私を心配してくれているんだと思いました。祖母や先生の言うことをちゃんと聞いて、勉強しようと心に決めました。



<沖縄戦>星条旗を掲げる米兵

祖母の家を出た後も、苦労は続きました。親戚の家を何軒も転々とさせられて生活しなくてはいけなかったのです。両親が生きていた時は私を一人前に扱ってくれた親戚も、人も物もお金もない、戦後の大変な時に面倒を見るのは負担が大きかったのです。扱いが戦争の前と違うんです。家族を失って傷ついている私は、そこにとっても敏感になっていきました。

■私は「絹子」

私と家族のつながりを記した公の台帳「戸籍」も、沖縄戦で焼けてなくなりました。私の正しい名前は「絹子」です。普段の生活や学校でもそう記してきました。しかし、戦争が終わってから作られた戸籍には、長らく「キヌ」と書かれていました。大人になって結婚して長く移り住んでいた熊本県で、キリスト教の牧師になる時に、沖縄に住むおじやおば、友達から届いた手紙を証拠として家庭裁判所に提出して、戸籍の名前を「絹子」に戻しました。

生まれた月日も、戦争と戦後の混乱の中で、記憶を失ってしま

いました。生き残った祖母が「だいたいこのぐらいだろう」と考えて生年月日を決めましたが、おばは正確に覚えてくれていました。私は戸籍の名前を改める時に、生年月日も直したいと望みましたが、証明する書類が残っていないため、あきらめざるを得ませんでした。「命があるだけで十分」と自分に言い聞かせました。

沖縄戦で亡くなった妹2人の名前は「つぎこ」「ふじこ」でしたが、戦後に作られた戸籍には載っていませんでした。妹たちが生きた証を何としても残したい、そのために戸籍に載せたい、と強く思うようになりました。



「一人ひとりの心の中に『平和のとりで』

を築いて下さい」とメッセージを送る石原さん

しかし、実家があった玉城村役場（今の南城市役所）に連絡して、沖縄戦を含む第2次世界大戦で亡くなったり、けがをした軍人や軍属、遺族を対象にした法律「戦傷病者戦没者遺族等援護法」を担当する職員に尋ねると「戸籍に載せるには、家庭裁判所で裁判を受ける必要があります。費用は1人当たり約100万円かかります」と言われ、ショックを受けました。当時は払える経済的な余裕がありませんでした。戦争でつらい思いをして亡くなったのに、生きた証さえ残せないのはあまりにもかわいそうで、耐えられませんでした。

私は、生き残った人間としてあきらめるわけにはいかないと決意しました。沖縄県が糸満市摩文仁に「平和の礎」を建てる時に2人の名前を申し出て、沖縄戦から50年がたつ1995年に、礎に刻んでもらいました。ようやく妹たちの生きた証を残せました。

■平和のとりで

今、日本政府は名護市辺野古の海を埋め立てて、新しいアメリカ軍基地を造ろうとしています。戦争はしないと誓った憲法9条も骨抜きにしようとしています。私は、70年前の悲惨な体験が風化して、また戦争の準備が進んでいると危ぶんでいます。だます政府と、だまされる国民がそろった時に起こるのが戦争です。どんなに残酷か...。もめごとは鉄砲や爆弾ではなく、英知で話し合って解決してほしいです。

テレビのニュースは今も日々、世界の各地で起きる戦争を伝えています。妹たちが亡くなった糸満市摩文仁に立つ沖縄県平和祈念資料館には「戦争をおこすのはたしかに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力のできるのも 私たち人間ではないでしょうか」と記されています。一人ひとりが心の中に「平和のとりで」を築きましょう。普段から、いじめられている人に気づいたら、自分と同じくらい大切にしてください。

私たちの沖縄考

朝日新聞デジタル 2019年6月21日 20時00分

2008年平和の詩「世界を見つめる目」 読谷小4年・嘉納英

佑
やせっぽちの男の子が
ほほえみながら、ぼくを見つめた
テレビの画面の中で……
ぼくも男の子を見つめた
どんな事があったの？
何があったの？
何も食べる物が無いんだ
でも、ぼくは生きたい
くるしいけど、あきらめない
ぼく がんばるよ
えがおが あふれる
生きる人間の力強さを感じた
ぼくは 真実を見つめる目を
持ちたいと思った
悲しそうな目をした女の子が
なみだをうかべながら、ぼくを見つめた
テレビの画面の中で
ぼくもその女の子を見つめた
なぜ、悲しい顔をしているの？
なぜ、ないているの？
せんそうで、家族もいなくなっちゃった
家も 友達も
全部、全部なくなっちゃった
悲しいよ さびしいよ
どうすればいいの 助けて
大切なものをなくした人間の弱さを感じた
ぼくは 涙をふいてあげる
やさしい手を持ちたいと思った
きずだらけの男の人が
苦しそうな顔をして ぼくを見つめた
本の写真の中で……
ぼくも男の人を見つめた
どうしたの？
いたいでしょ 大じょうぶ？
あらいからには なにも生まれはしない
おたがいにきずつくだけ
にくしみがつのるだけ
人間のおかしたあやまちの大きさを感じた
ぼくは やさしくてあてしてあげる
あたたかい心を持ちたいと思った
ぼくのとなりで
おじいちゃんが
自分の目で見てきたできごとを
ぼくに伝えた
苦しかったせんそうのできごと

おばあちゃんが
自分が体験してきたできごとを
ぼくに伝えた
こわかった そかい先でのできごと
お父さんが
自分が聞いたできごとを
ぼくに伝えた
食べる物がなく 苦しんでいる人がいる事
家がなく つらい思いをしている人がいる事
家族とはなればなれになってしまっている人
さんこくでひさんなできごと
悲しくなった つらくなった
お母さんが何も言わず
ぼくをだきしめた
むねがいっぱいになった
あたたかいぬくもりが
ずっとずっと ぼくの中でのこった
みんながしあわせになれるように
ぼくは、
世の中をしっかりと見つめ
世の中の声に耳をかたむけたい
そしていつまでも
やさしい手と
あたたかい心を持っていたい
(沖縄県平和祈念資料館提供)

平和の詩「永遠に」(全文) 私たちの沖縄考

朝日新聞デジタル 2019年6月21日 20時00分

1992年平和の詩「永遠に」 平良中3年・久貝菜奈

人間は、えらくなんかない。
だから、意味のない戦いをしてしまう。
人間は、強くなんかない。
だから、すぐに武器をもってしまう。
人間の殺しあいのせいで
地球上の多くのものが、
傷つき痛めつけられてしまう
風に揺れるさとうきびも
木蔭(こかげ)を作ってくれるがじゅまるの木も
青い海で泳ぎまわる熱帯魚も
庭でじゃれあう犬達(たち)も
みんな みんな
失われてしまうんだよ。
本当にえらいんなら
平和を大事にして
目先の利益だけに心をうばわれないで
本当に強いんなら
思いやりを忘れないで
弱いものの痛みに気づいてほしい。
憎しみだけじゃ悲しすぎる

苦しみだけじゃ耐えられない
みんなの笑顔をずっと見ていたいから
揺れるさとうきびをずっと見ていたいから
だから、守っていこう
この世界を。
きれいな海が、
再び死者で埋まることのないように。
人間は、えらくなつてないから……
決して
強くなつてないから……
一人一人の手で
平和を永遠に、守り続けようよ。
(沖縄県平和祈念資料館提供)

平和の詩「光がはねて、とてもまぶしい」(全文) 私たちの沖縄考

朝日新聞デジタル2019年6月21日20時00分
1994年平和の詩「光がはねて、とてもまぶしい」 読谷中3年・知花竜海
ポツリ、
ポツリと降りだした雨
久しぶりの雨
顔を空にむけ、身体をひろげ
うりずんの雨を全身でうけとめながら
僕は
走りすぎていく人たちを見ていた
五〇年前のこの雨の中
肉親を失い
傷をおい、手足をひきずり
食べるものもなく
着るものもなく
必死に逃げまどっていた人たちは
この降りしきる雨に
すべてを洗い流してほしいと
ねがったのだろうか
穴の中では
大人のうめき声、子どもたちが泣き叫ぶ
ザーザーと降る
この雨の音は
この声を消してくれただろうか
いやしてくれただろうか
きっと、さらに大きく、暗く、重く
ひびきわたらせたのだろうか
僕にはにくい
人の営みを、人の心を、生きる命を
一瞬にして無にする戦争が
僕はちかう
海と風のかおるこの島を
二度と殺させないと

僕はいう
世界中の人々はみんな愛しあえる
雨がやんだ
雨あがりのアスファルトに
光がはねて、とてもまぶしい
(沖縄県平和祈念資料館提供)

平和の詩「未来に向かって」(全文) 私たちの沖縄考
朝日新聞デジタル2019年6月21日20時00分
2002年平和の詩「未来に向かって」 具志川高3年・名護愛
1945年8月15日

終戦の日
戦争という名の
悲劇から
57年経った
今日も
平和に向かって
時を刻む音がする
しかし
まだ
「戦争」は
終わっていないのかもしれない
1972年5月15日
沖縄本土復帰の日
その日を前に
先生が
「平和」について
熱く語る
私は
「平和」について
真剣に考える
見たことのない戦争を
想像してみる
すると
真っ青に晴れた
雲一つない空に
米軍機の爆音が
響きわたる
先生の声は
爆音に消され
生徒の目は
音を睨(にら)む
戦争はまだ
「音」として
残っていた
米軍基地の前を
家路に向(むか)う
フェンスを背に
暑い日差しを浴びながら

輝（かが）やく笑顔で
子ども達（たち）が遊ぶ
フェンスの向こう側には
武装した軍人が
立っている
日差しに照らされ
汗だくの顔で
立っている
腕に持っている
銃は
誰に向けるのか
私の目は
銃を睨む
戦争はまだ
「武器」として
残っていた
五月晴れの午（ひる）さがり
家族連れの人々
恋人同士
友達同士
人・人・人の
あふれる中で
「めぐまれない人へ」の
キャッチフレーズと共に
笑うことを忘れて
未来に怯（おび）えている少女の瞳が
私を見つめる
私の目は
過去を睨む
戦争はまだ
「傷跡（きずあと）」として
残っていた
6月23日
慰霊の日
祖父と祖母
そして私
正午をつげる鐘
摩文仁に向かって
合掌する
ふしくれた手
しわが刻まれた
その頬に
涙が
こぼれ落ちる
その年老いた目が
見つめる先には
何があるのか
私も
見つめてみた

戦争はまだ
「悲鳴」として
残っていた
「爆音」が消え
「武器」は葬られ
「傷跡」は癒やされ
「悲鳴」は静寂と化す
その時
戦争という名の悲劇は
幕を閉じる
地球に生きる
人間
動物
自然が
互いの立場を
理解し
協調し合った
その瞬間
「平和」は
きっと生まれる
私は空を仰いだ
私は大きく息を吸った
私は遥（はる）か彼方（かなた）を見つめた
私の未来を想像した
乾いた大地に
恵みの雨が降る
雨は上がり
空には
一筋の虹が見える
風が
大地をそっとなでる
その風は
エイサーの音色とともに
人々の心を癒やし
広い海へ
広い世界へと
吹きわたり
平和の意義を
響かせてゆく
(沖縄県平和祈念資料館提供)